

大阪市立自然史博物館館報

8

(昭和52年度)

〒546 大阪市東住吉区東長居町長居公園内

大阪市立自然史博物館

昭和53年12月10日発行

目 次

日本の博物館に共通した「なやみ」	1
展覧事業	4
調査研究事業	8
資料収集保管事業	16
普及教育事業	23
庶 務	27
建物管理	37
利用案内	44

日本の博物館に共通した「なやみ」

—— 雑芸員？から学芸員へ ——

館 長 千 地 万 造

日本の博物館（国立の博物館を除く）には館長および専門職員として学芸員を置くことが博物館法によって定められている。その学芸員の職能は「博物館資料の収集、保管、展示及び調査研究その他これと関連する事業についての専門的事項」をつかさどることである。

具体的にいえば、学芸員は自己の専門分野の研究活動を基礎として、資料の収集を行い、それを整理保管すると同時に、その資料を用いて社会教育のための展示を組立て、また一般市民（学校教育の課程にあるものも含めて）に直接はたらきかけて教育活動をするのがその職能である。したがって、学芸員は専門分野の研究者であり、博物館教育の研究者でもあり、またその実施者という多面性を持たねばならない（倉田公裕；1970）。

これに対して、博物館に関して古い伝統をもつ欧米諸国では、博物館の専門職員は、研究系、教育系、展示技術系に大別されているのが普通である。もちろん、欧米諸国の博物館にも、規模の大小、目的・性格のちがいがあってすべてがこのようになっているわけではない。専門職員が2、3人の館もあれば数100人もの大規模なものもある。専門職員が20～30名ほどの中規模の博物館以上では、たいていの場合、この三系列の専門職員をもっている。わが国でいえば、少なくとも都道府県（指定都市）立の博物館はこの範ちゆうに入るのである。それは、広い市民層に、一般的で広範囲の社会教育活動を行わねばならず、また彼らからの知的・文化的要求に応えなければならないからである。

研究系の専門職は Curator を頂点とした研究スタッフと研究の補助をする技術スタッフとからなっていて、研究資料の収集、標本の作成、記録、整理保管、展示の企画、専門的な研究指導を行っている。教育系の専門職員は Educator を頂点とした教育者・教師グループであって、博物館における一般市民向け、および、学校の生徒向けの教育プログラムを立案・実施し、展示の解説なども仕事の一部に含まれ、同時に、博物館教育学的な調査研究を行っている。展示技術系の専門職員はアート・デザイナー、グラフィック・デザイナー、写真技師、模型や複製、剝製などの工作技術者など、展示を実際につくり上げてゆく技術者集団である。

1つの展示室をつくったり、展示コーナーを新設、あるいは改訂するときには、この三者が参加して企画がねり上げられてゆく。展示のための工事や工作は展示技術系のグループが実施する。

専門職員の人員が比較的多く、分業と協力の体制がうまく噛み合っている場合は、このような体制が理想的であろう。しかし、日本の現状では、まず人員の面で不可能に近い状態にあることは明らかである。しかし私は別の面から、学芸員をこのような三系列とくに研究系と教育系とを分離するのに反対である。第1の理由は、日本ではこのような分業と協力の思想がまだ十分に定着していないことである。おまけに、研究者上位の思想が根強く、また、大学の先生は高校の先生よりエライ、高校の先生は中学校の先生よりエライといった権威主義が博物館関係者も含めて広く人の頭の

中にこびりついているように思えるからである。博物館における研究には、専門分野の学術的研究と、「モノ」と「ヒト」とを結びつけるための教育学的研究とがあるが、自然史博物館や歴史・考古博物館など専門分野の学術研究が不可欠の博物館¹⁾にあって、教育学的研究が育ちにくい原因も、また、研究系学芸員と教育系学芸員との協力関係がうまくゆかない原因もひとつはここにあると思われるのである。私は学芸員というものは、専門分野での第一線の研究者（現役の研究者）であると同時にその分野での専門教育は勿論のこと、さらに関連ある広い分野での社会教育の実践者でなければならないと思っている。たとえば、私は古生物学の分野では有孔虫の化石を専攻し、地史学との関連において新生界の生層序学というごく限られた分野の研究をしている。このような研究が基礎になって、もう少し広い分野、たとえば大阪周辺の氷河時代の海域と海況の変遷、平野の地下の地質構造の調査研究にもたずさわる。そしてこのような研究は当然第四紀の大阪およびその周辺の自然の変遷の追求となり、それはまた日本列島全体の地史にかかわりを持ってくる。このようにテーマが個人テーマからより広範な総合的なものに拡大されてゆけば、研究方式も変化し、共同研究、総合研究になってゆく。そうした過程で、私は有孔虫や生層序学の知識だけでなく、地質構造発達史や第四紀学といったより広い関連分野の勉強をしなければならないことになる。私は専門の研究者として、求められれば微古生物学や生層序学の分野で、卒業研究にとり組む学生や、若い研究者の指導をすることもある。しかし学芸員としては、私が研究の過程で身につけた知識と収集した資料（モノ）を生かして、自然の生いたちや自然の見方を市民の中に普及し、人間にとって自然とは何か、人間は自然をどのように扱わなければならないのかを深く考える人をつくる努力をしなければならないわけである。そのためにはどのような展示が必要なのか、どのような教育プログラムが必要なのかといった教育学的な調査研究にもかかわらなくてはならなくなってくる。それだけではなく、私はまた、自分のえた学識と経験の上に立って、社会の人々の文化と生活をより豊かにするために、博物館がいま何をどのように収集し、それを資料としていかに保管すべきかを考え、それを実施しなければならない。

博物館の活動には資料とくに一次資料（標本）が不可欠の要素である。資料の蓄積がなければ博物館とはいえない。収集した「モノ」は資料化の過程をへて博物館資料として保管される。この資料化の過程が実は大へんな仕事である。収集記録の作成、保存上の技術的処理（整形、剖出、マウント、修復、害虫・カビの防除、防霉等々）、ラベルの作成、整理分類、登録などの作業を経なければ博物館資料とはならないのである。

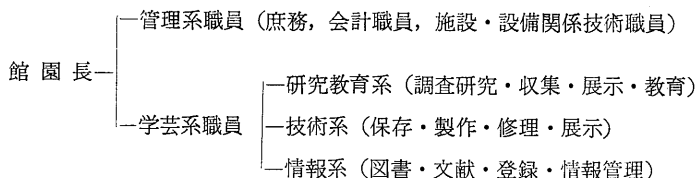
こうしてみると、学芸員の仕事は本筋の部分だけでも大へんなものであるが、おまけに、日々こちらの都合におかまいなしにとび込んでくる質問の応答、解説のパネル書き、標本の交換、文献・図書の交換など諸々の事務のおよびサービスの業務がわれわれを追いかける。学芸員は雑芸員だとはいみじくも言い当てたものである。

それではやはり、研究系、教育系、展示系に分離した方がよいではないかということにもなる。しかし私は学芸員は研究者であり教育者でなければならないと思う。そのためには学芸員を雑芸員にしておいてはならない。

展示の企画・構成まで外注するようなことは絶対にあってはならないが、展示工作は外注すればよいであろう。当面もっとも必要なのは、収集した「モノ」を技術的に処理し、資料化をたすける技術者の配置である。自然史系博物館では、1回の資料収集で大量の「モノ」が収集されるのがふ

つうである。それが植物であればプレスして乾燥し、それを台紙に貼付して「おしば標本」にした
 り、多肉でやわらかい果実やおしばにすると原形がわからなくなる花などはアルコールあるいはホル
 マリンの液浸標本にする。またおしばにしないでそのまま乾燥するとよいものもある。昆虫の場
 合は展翅や整形して乾燥し、ラベルをつけてマウントする。この場合もものによっていろいろな方法
 が異なる。自然資料は多種多様であり、それぞれによって、整形・保存・保管の技術的な処理法が異
 り、また熟練を必要とする。おまけにその収集量は大量である。このようなプレパレーションに学
 芸員は実に多くの時間をさかねばならない。調査研究・資料収集・展示教育といった学芸活動がこ
 のプレパレーションに費やす時間によって大きく制約され、学芸員の職能を殺している。うらがえ
 せば、学芸員がプレパレーションの時間的な制約から解放されれば、博物館の機能は今よりも何倍
 も増加し高まることになるのである。前述の欧米の博物館における研究系専門職員のグループとい
 うのは、研究者だけの集団ではなく、研究者に研究と資料収集と展示教育の職能を十分発揮させる
 ための蔭の力となるこの種のプレパレーション技術者、タイピスト兼研究秘書、収集補助員などか
 ら構成された集団なのである。

日本の博物館法ではこのような技術者は要員ではなくお添えものになっている。博物館法第四条
 第5項「博物館に、館長及び学芸員のほか、学芸員補その他の職員を置くことができる」にそれは
 明らかである。しかしこれまでくどくどと述べて来たように、資料のプレパレーションのための技
 術者は学芸活動にとって不可欠の要員なのである。博物館における職種の確立と要員の確保が早急
 にのぞまれるのである。現状からみた日本の博物館事業を一步前進させるためにどうしても必要な
 ことは、博物館の職員構成を次のように規定し、それを実施することである。



そしてまたこれが、公立博物館の設置及び運営に関する基準の取扱いについて（昭和48・11・30）²⁾、の第10項の基本理念であろう。そのためにも現行の学芸員制度は根本的に見直さねばならない。

1) 新井重三（1973）はこの種の博物館を Curatorial Museum と称している。

2) 昭和48年11月30日，文社社第141号社会教育局長通達。

展 覧 事 業

自然史博物館の展示は、①自然界に多様な物質が存在すること、②その多様性は地球の発展史の産物であること、③人間自身もまた発展史の産物であり、生存と生活の向上は多様な物質とのかかわりをはなれては有り得ぬことを、市民・児童に普及することを目的とする。個々のテーマや特別展・特別陳列は①～③のいずれかに偏ることはあっても、展示全体としては一貫した主張をすることが目的である。

I 常設展

展示の基本的な考え方や、館の運営方針等については、館報「特別号」に、また常設展は「第6号」に詳細に記載した。ギャラリーの展示は「第7号」に記載したが、一部追加展示をしたので、ここに記す。

■ ギャラリー

人の家に巣づくる虫たち（キイロスズメバチ・フタモンアシナガバチ・セグロアシナガバチ？・ジガバチ等ハチの巣、クロクサアリ？、イエヒメアリ、イエシロアリ・ヤマトシロアリの巣と虫。

II 特別展

■ 第4回特別展「和泉山脈の自然」

開館以来、大阪付近の身近な自然をとりあげて特別展を行ってきたが、本年度は大阪の南に東西に連なる和泉山脈をとりあげた。

和泉山脈は大阪付近ではもっとも山らしい自然環境が残されたところであり、古くから私たちとのかかわりが深い山であるとともに、最近ではレクリエーションの場としても重要な意味をもっている。

特別展では、昭和51年度に当館が中心になって行われた金剛・生駒・和泉山脈地域の学術調査の成果をもとに、和泉山脈の生いたちと自然を紹介しながら、こうした自然環境の保全の重要性についても考える機会となるよう企画した。

●期間 昭和52年10月1日～11月30日

●主な内容

- (1) 和泉山脈と私たち
- (2) 和泉山脈の地質と生いたち（地質・化石・石材など）
- (3) 和泉山脈の溪流と生物
- (4) 和泉山脈の昆虫
- (5) 和泉山脈の植物
- (6) 和泉山脈の自然かんさつ

（内容の詳細は、展示見取図を参照して下さい）

●協賛・後援

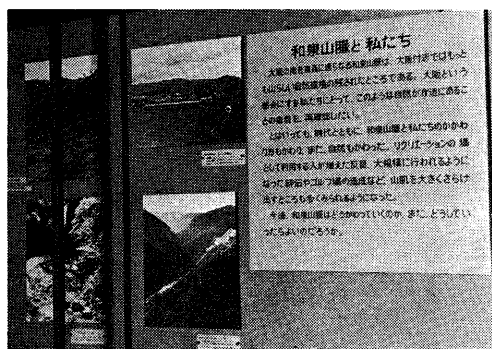
PRの効果をあげるため、はじめての試みとして、和泉山脈に関係の深い各市町教育委員会および交通機関に協賛名義の使用を依頼し、ポスター等に記載した。

（協賛）堺市・岸和田市・泉大津市・貝塚市・泉佐野市・河内長野市・和泉市・高石市・泉南市・忠岡町・熊取町・田尻町・阪南町・岬町以上各市町教育委員会および南海電気鉄道株式会社

（後援）天王寺鉄道管理局

●特別展関連普及行事

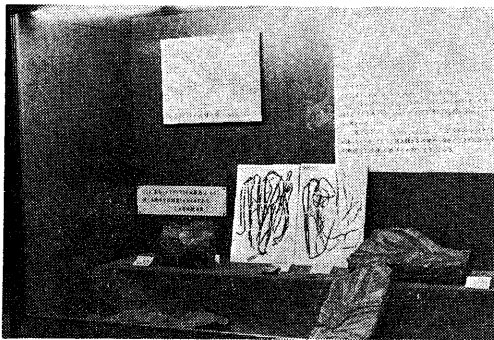
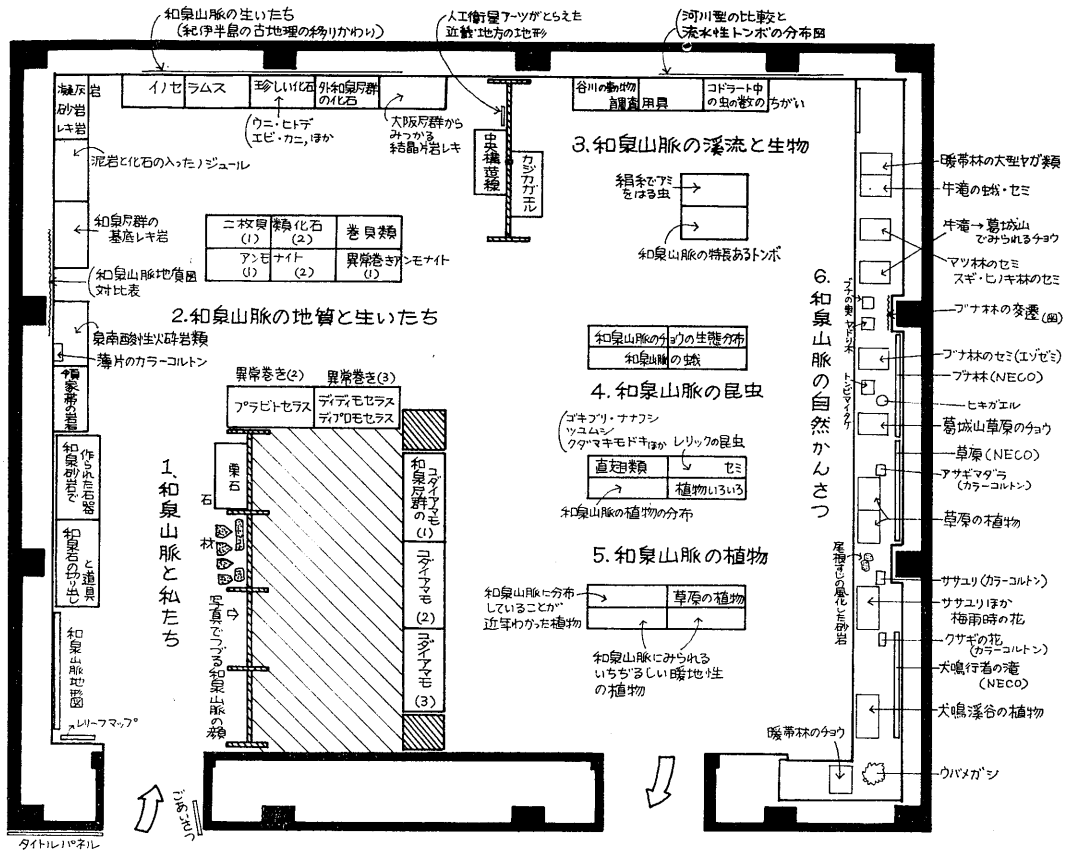
特別展の主旨をより深めるため、期間中に特別展の内容に関連した野外行事「舊原の自然と地質」と2回の普及講演会を行った（普及教育事業の項参照）。



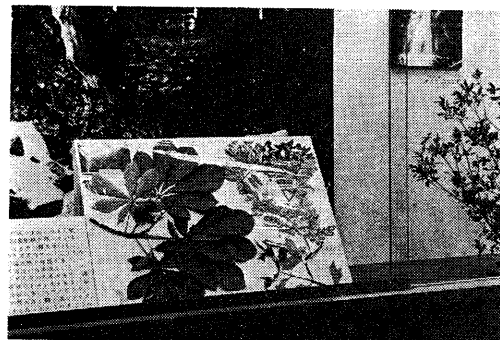
■ 特別展入館者数（昭和49年度～52年度）

種別 年度	個人		団体		無料 幼・小 中学生	合計	開催期 間及び 実開催 日数
	大人	小人	大人	小人			
49	6,822	5,628	1,410	2,111	10,554	26,525	10/15～ 11/17 30日間
50	5,967	4,864	1,782	9,312	6,718	28,643	10/15～ 11/30 41日間
51	7,591	8,401	506	752	171	17,421	8/1～ 8/31 26日間
52	7,684	6,280	2,074	16,974	9,997	43,009	10/1～ 11/30 50日間

（49年度タイトル：チヨウはどこから来たか「日本の蝶・世界の蝶」、50年度タイトル：「石器をうみだした山・二上山―その生いたちと自然」、51年度タイトル：「大阪湾の海岸生物」52年度タイトル：「和泉山脈の自然」）



(コダイアママ)



(犬鳴溪谷の植物)

Ⅲ 特別陳列

■ 有珠山の火山灰

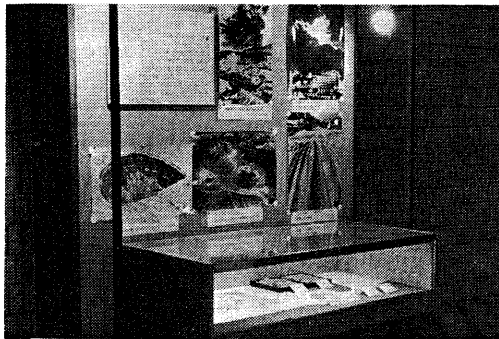
昭和52年8月7日、突然噴火爆発し、大きな被害を与えた北海道の有珠山の火山灰や軽石を当館学芸員が採取してきたので展示した。

- 期間 昭和52年8月16日～10月29日
- 場所 オリエンテーション・ホール
- 展示品 有珠山南東数kmに降下した火山灰・軽石
札幌市内に降下した火山灰

写真数点(噴火爆発状況、爆発による有珠山の変化、降灰状況等を示す写真)

■ 南極の岩石

10月11日に砕氷艦「ふじ」の艦長田辺元起氏が大阪市を表敬訪問し、「ふじ」のレリーフを入れた楯とともに南極、昭和基地付近の岩石を寄贈された。さっそく今回寄贈を受けた岩石(ざくろ石片麻岩)、楯とともに写真数葉、昭和基地付近の地質図、以前に寄贈された南極の



(有珠山の火山灰)

岩石とともに展示した。

●期間 昭和52年11月1日～昭和53年4月3日

●場所 オリエンテーション・ホール

■ 日本・外国の昆虫 (寄贈標本)

主として、昭和51年当初から年末にかけて寄贈をうけた昆虫標本のうち、かなりまとまったコレクションを展示した。(総数3,583点) 蝶が大部分で、モロッコの蝶など館にはこれまでになかった標本も含まれている。

●期間 昭和52年12月17日～昭和53年5月7日

●内容 (順不同)

- | | |
|-----------------------|---------|
| (1) 木下総一郎氏 (摂津市) 寄贈 | |
| モロッコ・ヨーロッパ産蝶 | 9種26点 |
| 東南アジア・日本産蝶 | 378点 |
| (2) 衣笠弘直氏 (鳥取県) 寄贈 | |
| 鳥取県八頭郡産トンボ | 40種654点 |
| (3) 西川喜朗氏 (追手門学院大) 寄贈 | |
| ドイツ産甲虫 | 71種102点 |
| (4) 藤田安見氏 (西宮市) 寄贈 | |
| ニューキャレドニア産蝶 | 17種49点 |
| (5) 伊賀正汎氏 (阿倍野区) 寄贈 | |
| 外国産翅類・半翅類など | 72点 |
| (6) 小野山 充氏 (京都市) 寄贈 | |
| 日本・世界の蝶 | 1,506点 |
| (7) 花田勝治氏 (京都市) 寄贈 | |
| 日本・台湾の蝶 | 796点 |

●場所 特別展示室

そのほか、「人の家に巣を作る昆虫たち」というテーマで、ガラスケース1台の展示を、昭和52年12月17日から特別展示室外のギャラリーで行なった。内容は、イエシロアリの巣・女王・有翅虫・兵アリ・職蟻・巣板、ヤマトシロアリの女王・王・兵アリ・職蟻・食害材、オオシロアリの兵アリ・職蟻(以上はホームサービスKKの荒木 裕氏寄贈)、キイロスズメバチの巣、アシナガバ

チの巣、ジガバチの巣、イエヒメアリ・クロクサアリなど。この展示は常設展示として残し、昭和53年5月以後もひきつづきギャラリーで展示している。

■ ヨーロッパの両生爬虫類 (寄贈標本)

粉川昭平・西川喜朗両氏寄贈の下記の標本を展示した。会期は上記の昆虫展示と同時である。

ヨーロッパヤマカガシ、ヨーロッパカガエル、コガタトノサマガエル、ミドリヒキガエル、ナタージャックヒキガエル、スイスイモリ、ヨーロッパヤマカガシ。

■ 鹿児島沖の底生動物 (寄贈標本)

和歌山県白浜町の今岡亨氏から寄贈の、鹿児島沖(北緯31°26′, 東経129°52′)深さ約300mの海底から採集された無脊椎動物標本437点のうち、77点を選んで展示した。変わった姿・形の種類が多く、海底での動物の生活を知るうえで、貴重な標本である。

●期間 昭和52年12月17日～昭和53年5月7日

●内容 トリノアシ、ミョウガガイ、ウミエラ、イガグリガニ、カルイシヤドカリ、ガラスカイメン類、ブンブク類など。

■ 野尻湖発掘パネル展

野尻湖発掘調査について、パネルを中心とした展示を行なった。

野尻湖発掘は、1962年の第1次発掘以来回を重ねて1978年3月には第7次発掘が行なわれた。第5次(1973年)、第6次(1975年)の発掘は新聞各紙で大きく報道され、一般にも広く知られるようになった。しかし、その成果や、どのようにしていわゆる大衆発掘が行なわれているのかなど、発掘参加者以外にはまだあまり知られていない現状にある。そこで第7次発掘をひかえて、大阪でもその一部分でも知っていただきたいと考え、展示を企画した。なお、時期的な制約から実物の化石はごくわずかしかな展示できなかった。

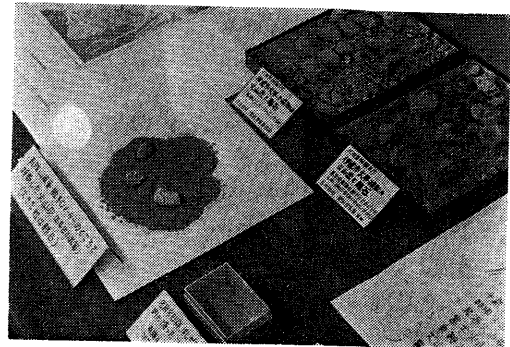
●期間 昭和53年2月14日～4月2日

●場所 特別展示室

●内容 大衆発掘・発掘の歴史・発掘のはじまりからおわりまで・発掘成果ほか。

Ⅳ 入館者（昭和52年度）

区分 月別	有 料		無 料	計	開館日数 (日曜日数)
	大 人	小 人	幼・小・ 中学生		
4	10,071	8,629	454	19,154	25 (4)
5	11,119	13,114	6,239	30,472	24 (5)
6	4,111	5,028	3,422	12,561	26 (4)
7	3,973	4,786	392	9,151	27 (5)
8	7,465	8,712	59	16,236	26 (4)
9	4,170	4,472	2,346	10,988	24 (4)
10	6,370	13,074	5,489	24,933	26 (5)
11	3,388	10,180	4,508	18,076	24 (4)
12	1,509	2,898	415	4,822	22 (4)
1	2,064	2,868	923	5,855	23 (4)
2	2,339	2,950	784	6,073	23 (4)
3	7,045	10,277	4,336	21,658	26 (4)
計	63,624	86,988	29,367	179,979	296(51)



(有珠山の火山灰)

Ⅴ 出版・印刷物

名 称	対 象	規 格	ページ数	備 考
大 阪 の 昆 虫 (陸生篇Ⅰ) (展示解説第3集)	一般市民	B 5	69	1978年3月 (有料400円)
リーフレット No.31, 34, 36~48 (No.31) カ イ メ ン (海綿) (No.34) 木 の 葉 (No.36) リュウグウノツカイ (No.37) シギウナギ (No.38) リンボク (鱗木) (No.39) オオミノガ (ミノムシ) (No.40) イナゴ (No.41) 紡錘虫 (ぼうすいちゅう) (No.42) ツクツクボウシ (No.43) イタカアワダチソウ (No.44) 和泉山脈の自然 (No.45) アメリカジガバチ (No.46) ナメクジウオ (No.47) クレミ (No.48) アメリカマストドン	入 館 者	B 5	2 (一葉)	毎月1~2号あて (無料)
和 泉 山 脈 の 自 然 (特別展解説)	一般市民	B 5	52	1977年10月 (有料250円)

調査・研究事業

博物学は西洋において自然界の多様な諸物質を発見し、その属性をしらべ、知識を整備する活動として始まり、本草学は東洋において医薬として有用な物質の知識の集積を目的として起った。いわば言葉の世界における辞書づくり、のような作業である。進化論の登場によって、多様な物質が地球の発展史の産物として理解される道がひらけた。自然史科学は、学問のこのような発展をふまえた上で、さらに諸物質を人類とのかかわりにおいて再評価・再検討する活動であると定義したい。

個々の学芸員の研究は材料はもとより、研究方法もフィールドもさまざまである。しかし館全体としては、このような個人研究活動の結果を総合し、大阪を中心とした地域における自然と人類の関係史を編むことを目的としている。

I 研究体制

学芸系のスタッフは、すべて学芸課に所属し、5部門の研究室において、研究業務を行っている。館長も研究者という立場上は、地史研究室に所属している。

地史研究室	千地万造 (Manzo CHIJ1) 両角芳郎 (Yoshiro MOROZUMI) 石井久夫 (Hisao ISHII)	館長, 学芸員 学芸員 学芸員
第四紀研究室	那須孝悌 (Takayoshi NASU) 樽野博幸 (Hiroyuki TARUNO)	学芸員 学芸員
動物研究室	柴田保彦 (Yasuhiko SHIBATA) 山西良平 (Ryohei YAMANISHI)	主任学芸員 学芸員補
昆虫研究室	日浦 勇 (Isamu HIURA) 宮武頼夫 (Yorio MIYATAKE)	学芸課長, 学芸員 学芸員
植物研究室	瀬戸 剛 (Ko SETO) 岡本素治 (Motoharu OKAMOTO) 布谷知夫 (Tomoo NUNOTANI)	学芸員 学芸員 学芸員

II 個別調査研究

千地万造 (地史研究室)

- (1) 山梨県富士川上流下部 (しもべ) 地域および群馬県富岡地域の新第三系の生層序学的研究 (総研 A, 234052)
- (2) 能登半島の段丘堆積物中の化石有孔虫群集 (総研 A, 334049)
- (3) 北摂山地の自然保護に関する基礎調査 (日本自然保護協会関西支部)
- (4) 泉州地域の洪積層における地盤沈下に関する調査 (土質工学会関西支部)

両角芳郎 (地史研究室)

- (1) 北陸地方新第三系の生層序区分に関する研究。
前年度に引きつづき、富山県水見市周辺に分布する新第三系の微化石層序学的検討を行った。そのうち藪田層について一定の成果を得たので、発表するべく原稿を準備中。
- (2) 和泉層群産化石に関する研究。
アンモナイト (特にゴードリセラスとパキディスカス) について検討した。
- (3) 大阪湾の有孔虫群集に関する研究。
京都大学瀬戸臨海実験所の調査船に便乗し、大阪湾の底質を採取した。
- (4) 大和川の川原の礫の調査。
長原遺跡の礫層の礫と比較検討のため上記調査を行い、結果を原稿にして提出した。

石井久夫 (地史研究室)

- (1) 曾爾層群の層序学的研究を開始した。
- (2) 「野尻湖周辺の人類遺跡ならびに自然環境に関する総合研究」に参加、地質調査をおこなった。
- (3) 長崎県佐世保市泉福寺洞穴遺跡発掘調査に参加し遺物包含層の検討と洞穴の成因について調査した。

那須孝悌 (第四紀研究室)

- (1) シダ植物胞子の形態学的研究 (瀬戸学芸員と共同研究)
- (2) ミズワラビの胞子形態および化石胞子の研究 (瀬戸学芸員と共同研究、当館研究報告31号に発表、文部省科学研究費補助金一般研究 D)
- (3) 日本産タデ属およびソバ属の花粉形態の研究 (華頂女子高飯田祥子教諭と共同研究、当館研究報告31号に発表)
- (4) 長野県野尻湖周辺の第四系花粉化石の研究。
- (5) 静岡県清水市天王山遺跡出土の植物遺体および花粉の研究。
- (6) 福井県浜島遺跡の花粉分析 (文部省科学研究費補助金特定研究「自然科学の手法による遺跡・古文化財等の研究」)
- (7) 大阪市およびその周辺の遺跡に関する層序・古環境および出土する植物遺体・花粉の研究 (大阪市難波宮址・森の宮遺跡、大阪市平野区長原遺跡、加美遺跡、東大阪市鬼虎川遺跡、伊丹市原田処理場内遺跡)

樽野博幸 (第四紀研究室)

- (1) 備讃瀬戸産スィギュウ属化石 *Bubalus* sp. の研究
研究報告31号に発表した。
- (2) 長野県野尻湖産、哺乳類化石の研究。

(3) 明石市沖海底産の アカシゾウ *Stegodon akashiensis* の研究。

(4) 大阪市内および周辺の遺跡に関する層序・古環境および出土する動物遺体の研究（大阪市難波宮址・森の宮遺跡，大阪市平野区長原遺跡，加美遺跡，東大阪市鬼虎川遺跡，伊丹市原田処理場内遺跡，奈良県大福遺跡）。

(5) ウルム氷期以降の哺乳類化石に関する生物地理学的研究（文部省科研費総研A）。

柴田彦彦（動物研究室）

(1) 西日本島嶼の両生爬虫類相

昨年に引きつづき，天草諸島を調査した。

(2) 北摂山地の両生爬虫類相の予備的な調査を行った。

山西良平（動物研究室）

(1) 西日本各地で採集された間隙生多毛類の分類学的研究。

(2) 大阪湾沿岸の海浜における間隙生動物の生態学的研究。1977年度より調査中。

(3) 大阪湾沿岸の岩礁・人工海岸における付着生物の分布と動態に関する研究。京都大学布施慎一郎助手と共同で1976年度より調査中。

(4) 田辺湾底生生物調査（共同研究）に参加。1977年度より調査中。

日浦 勇（昆虫研究室）

(1) 大阪の昆虫相の研究。北摂山地の調査を行なった（総合研究の項参照）。昆虫相についての考察を展示解説「大阪の昆虫」で行った。

(2) 遺跡の昆虫遺体の調査。大阪市長原遺跡について報告し，伊丹市原田遺跡の中間報告を行った。

(3) ウルム氷期昆虫分布の考察。第七次野尻湖発掘に参加し，昆虫化石を調査した。文部省科研費による総合研究「ウルム氷期の生物地理」に参加し，分布パターンにたいする考えをとりまとめた（別項参照）。また蝶相にたいする考えを日本鱗翅学会大会でのべた。

(4) マツクイムシ防除のための薬剤空中散布による昆虫相の被害。奈良県二上山において51・52年度に調査し，概況をとりまとめた。

(5) 蝶の分類と生物地理，ネパール産スジグロチョウ，対馬産タイワンモンシロチョウ，ナガサキアゲハについて考察を行った。ギフチョウの分布を決定する要因としてのカンアオイの分布調査結果を「自然史研究」でまとめた。近縁種群の分布パターンについて若干の考察を行った。

宮武頼夫（昆虫研究室）

(1) 大阪の昆虫相の調査・研究。北摂山地の調査を行ない（総合研究の項参照），主として，セミ・蛾・大型水生昆虫・ホタル類についての調査の結果と従来の知見をまとめて，報告書に執筆した。その一部は，当館の展示解説第4集「大阪の昆虫 — 陸生篇I」にものせた。

(2) 日本産キジラミ・コナジラミ類の分類と生活史の研究。グミにつくオオトガラキジラミ3種について分類学的研究を行な，当館の研究報告31号に発表し，2新種の記載をした。広島県比婆郡比和町の資料を調べ，6種のキジラミを他の同翅類とともに，同町教育委員会発行の「比和の自然」に報告した。コナジラミ類については，分類学的研究を続行中であるが，大阪産の数種について，成虫を得た。

(3) 昆虫遺体（化石）の研究。野尻湖昆虫グループのメンバーとともに，伊丹市原田遺跡の発掘を行ない，昆虫遺体の調査をした。日浦学芸員とともに，第七次野尻湖発掘に参加して，昆虫化石の調査を行ない，その後研究続行中である。

瀬戸 剛（植物研究室）

(1) ミズワラビの分類についての研究。

(2) 大阪平野のヤナギ属種類相調査（前年度から継続，館報6号参照）

岡本素治（植物研究室）

(1) ブナ科の分類学的研究

ブナ科植物の冬芽の形態にいろいろな型のあることを示し，それらの型がどのようにして導かれたかを考えた。特に，芽鱗の形態を重視し，托葉の起源と関連させて考察した。当館研究報告31号に発表。

(2) 種子及び果実標本の収集，及び植物の種子散布機構に関する調査。今後も継続して調査を進めるとともに，普及行事にとり入れてゆき，54年度の特別展に結集させたいと考えている。

(3) 近畿地方の照葉樹林の研究。

布谷知夫（植物研究室）

(1) 林床植生の構造と動態についての研究

前年度より継続（館報6号参照）の大枝ヒノキ林の調査と，そのまとめを行ない，当館研究報告31号に発表した。

(2) 間伐による林床植生への影響についての研究

前年度より継続（館報6号参照）。

(3) ブナ林の退行遷移についての研究

昨年度調査した大阪府下のブナ林についてのまとめを行ない，当館研究報告31号に発表した。

(4) アラカン林の研究

大阪の森研究グループの一員として池田市五月山のアラカシ林の調査を行ない、結果をNature Study 24巻2号にまとめた。

(5) 京滋バイパス環境調査

京滋バイパスの環境アセスメント調査グループの一員として、予定地域内の植生調査及び毎木調査を行なった。現在、継続調査中。

(6) 展示の利用方法とその効果についての研究

見学用テキストを使用したアンケート調査や、入館者の動線調査等を行なった。継続調査中。

Ⅲ 研究業績の公表

■ 当館より発行された刊行物

大阪市立自然史博物館研究報告 (Bulletin of the Osaka Museum of Natural History)

第31号 (昭和53年3月31日発行) 123頁13図版。

*は館外研究者。〔No.〕は当館業績番号。

布谷知夫：林床植生の構造と動態 (I) 大枝ヒノキ林における齡構成と分布様式。1—11。〔No.215〕

奥田 潔*・石田 克*・河村善也*・熊田 満*・西田 須賀子*・石田一英*：岐阜県熊石洞産のヘラシカ化石について。13—24, pls. 1—5。〔No.216〕

布谷知夫：ブナ林に見られる二次林化について。27—37。〔No.217〕

春沢圭太郎*：奈良県大峰山脈のコクロナガオサムシ。39—46。〔No.218〕

桂 孝次郎*・富永 修*・日浦 勇・土井仲治郎*・春沢圭太郎*・谷幸三*：伊勢・志摩地方のオサムシ分布。47—60。〔No.219〕

那須孝悌・飯田祥子*：日本産タデ属およびソバ属の花粉形態。61—79, pls. 6—9。〔No.220〕

岡本素治：ブナ科の分類学的研究—Ⅱ。冬芽の形態。81—92。〔No.221〕

宮武頼夫：日本産オオトガリキジラミ属について (英文)。93—111, pl. 10。〔No.222〕

那須孝悌・瀬戸 剛：ミズワラビの胞子形態。113—117, pl. 11。〔No.223〕

樽野博幸・山本慶一*：備後瀬戸からスイギュウ属化石の発見—略報—。119—123, pls. 12—13。〔No. 224〕

自然史研究 (Occasional Papers from the Osaka Museum of Natural History) [略称：研究短報]

第1巻第11号 (昭和52年12月24日発行) 6頁

日浦 勇：二上山地域におけるカンアオイ属の分布〔No.210〕

第1巻第12号 (昭和52年12月24日発行) 18頁1表

堀田 満*：近畿地方におけるタンポポ類の分布〔No.213〕

■ 研究室別報文一覧 (当館刊行物をのぞく)

昭和52年度において、当館発行の刊行物以外に印刷された報文を、研究室別に列挙した。複数の学芸員によるものは、筆頭者の欄へおさめた。口頭による学会等の発表で要旨が印刷されなかったもの等は登載しない。「Nature Study」は ns と略記した。*は当館学芸員でない共著者。

(動物研究室)

柴田保彦 (1977・3) [昭和51年度追加] [昭和51年度博物館職員研修会 (自然史系), 1976年8月, 当館での討論中の発言]。昭和51年度博物館研究協議会報告 (日本博物館協会) : 77。

—— (1978・3) 三重県・和歌山県・兵庫県のシロマダラ。ns.24(3) : 32。

布村 昇 (1977・5) 会員のみなさんへ御あいさつ。ns.23(5) : 58。

—— (1977・7) 九州天草の海棲等脚目 (I) (英文) [Marine Isopoda from Amakusa, Kyushu (I)] 九州大学理学部附属天草臨海実験所研究報告 [Publ. Amakusa Mar. Biol. Lab., Kyushu Univ.,] 4(2) : 71—90。〔No.196〕

山西良平 (1977・11) [新学芸員の紹介欄。] ns.23(11) : 132。

—— (1978・2) メイオベントスと間隙生動物。ns.24(2) : 17—20。

(植物研究室)

瀬戸 剛 (1978・2) アカウキクサ雑記。しだとこけ, 11 (1—4) : 35—38。

—— (1978・3) ヤナギの花。ns.24(3) : 33—34。

岡本素治 (1977・4) ヒヨドリとムクドリ。ns.23(4) : 46。

—— (1977・5) 公園の植物(3)シナサワグルミ。ns.23(5) : 55—57。

—— (1977・7) 豆笛の豆から。ns.23(7) : 79—81。

—— (1977・10) イヌビワとイヌビワコバチ。ns.23(10) : 113—116。

岡本素治・加納康嗣* (1977・12) カンアオイの花のまわりの虫たち。ns.23(12) : 137—139。

岡本素治 (1977・12) 飼育下における若干の観察と行きすぎたかもしれぬ考察。ns.23(12) : 139—140。

—— (1978・2) 植物スケッチクラブの御案内。

- ns.24 (2) : 20。
- 布谷知夫 (1977・3) [昭和51年度追加] 野外行事の
すすめ方 [昭和51年度博物館職員研修会 (自然史
系), 1976年8月, 当館, 講演要旨]。昭和51年度
博物館研究協議会報告 (日本博物館協会) : 73-77。
- (1977・3) [昭和51年度追加] [同上, 討
議での発言]。同上 : 77-78, 87。
- (1977・6) 妙見山のブナ林⁽²⁾。ns.23(6) :
67-68。
- 藤本浩之輔*・布谷知夫・黒沢孝生, 司会 : 大寺俊紀
(1977・7) [座談会] これからの野外活動。みみ
ず (自然の会), 1(2) : 3-9。〔再録。都市と自
然, 2(3・4) : 13-15; 2(5) : 7-10。〕
- 布谷知夫 (1977・8) 縞枯山の, いわゆる「しまがれ
現象」について。(講演要旨・プレプリント) 花粉
科学シンポジウム講演要旨 [集] (花粉研究会主催,
1977年8月, 霧ヶ峯) : 9-13。
- (1977・10) 草原の調査法入門——層別刈取
り——。ns.23(10) : 117-118, 116。
- 大阪の森林研究グループ [布谷知夫ほか10名*] (1978
・2) 五月山のアラカシ林。ns.24(2) : 21-23。
- 布谷 [知夫] (1978・2) 本の紹介「瑞浪市化石博物
館研究報告第4集。」ns.24(2) : 24。
- (昆虫研究室)
- 日浦 勇 (1976・8) [昭和51年度追加] 種子をはこ
ぶアリ。佐藤晴美編。フィールドノート。藤森書店
 : 136-138。
- (1977・3) [昭和51年度追加] [昭和51年
度博物館職員研修会 (自然史系), 1976年8月, 当
館での討論中の発言]。昭和51年度博物館研究協議
会報告 (日本博物館協会) : 64, 65, 72, 78, 83-
84, 86-87, 89-92。
- 日浦 勇・加納康嗣* (1977・4, 6) ギフチョウの訪
れる花 (I), (II)。ns.23(4) : 38-40; 23(6) : 65
-66。
- 日浦 勇 (1977・7) 鳳蝶遍歴。アルプ, (233) : 22
-27。
- (1977・7) 身近な自然観察②川は子どもた
ちを育む母だ。アサヒグラフ増刊7月10日号 : 46-
48。
- 伊藤修二郎*・奥谷禎一*・日浦 勇 (1977・8) [編
著] 保育社の原色図鑑3, 原色日本昆虫図鑑 (下)
(全改訂新版)。保育社。385頁, 64図版。
- 日浦 勇 (1977・8) [分担執筆] トンボ目 (蜻蛉目)
・コオロギモドキ目・網翅目・ハサミムシ目 (革翅
目・ナナフシ目・直翅目 (跳躍目)・半翅目異翅亜
目 (カメムシ亜目)・シリアゲムシ目 (長翅目)・
脈翅目。同上 : 11-40, 46-81, 95-129, 175-
183; pls. 3-15, 17-25, 27-33, 41-42。
- (1977・8, 11; 1978・2) スミチオンの空
中散布による小型動物の被害——奈良県二上山の場
合——その1, その2, その3。ns.23(8) : 86-88
; 23(11) : 122-123; 24(2) : 14-15。
- (1977・8) 平野区にタマムシ。ns.23(8) :
89。
- (1977・8) エゴノキの花は一年おきに咲く。
ns.23(8) : 89。
- (1977・8, 9) 1センチ以上の昆虫誌5。
ウスバカゲロウ [1], [2]。ns.23(8) : 89-91;
23(9) : 98-100。
- (1977・9) <新しい論文の紹介> 『Gra-
phium 亜属の系統と生物地理』。昆虫と自然, 12
(9) : 15。
- (1977・9) ネパール産スジグロチョウ類の
1種について——ピエリス・ノート1——。蝶と蛾,
28(3) : 109-114。[No.211]
- (1977・9) われわれにとって「蝶」とは何
か——放飼問題を考えるために (I) ——。やどり
が (日本鱗翅学会), (89・90) : 35-37。
- (1977・9) 中国地方の生物地理の問題点。
比和の自然 (比和町立科学博物館編) : 141-148。
- (1977・9) 広島県比和町の直翅型昆虫。同
上 : 233-238。
- 日浦 勇・中村慎吾* (1977・9) 広島県比和町の異翅
半翅類。同上 : 247-254。
- 日浦 勇 (1977・10) 生物地理と進化学その4。昆虫
の生物地理と進化。科学の実験, 28(10) : 786-793。
- (1977・11) 例年より早いイチモンジセリ
の移動 (その2)。ns.23(11) : 124。
- (1977・11) 1977年の同定会でみた昆虫。
ns.23(11) : 124。
- (1977・11) 長居公園にモンキアゲハ。ns.
23(11) : 130。
- (1977・11) 榎原神宮でシロマダラ。ns.23
(11) : 130。
- 亀井節夫*・小林恒明・西村三郎*・村田 源*・日浦
勇 (1977・11) [座談会] 生物の進化と地理的分布
をめぐって。科学の実験, 28(12) : 972-981。
- 日浦 勇 (1977・12) [書評] ジョージ・オーディッ
シュ著, 中村屈子訳 チョウの季節。自然, 32(12) :

- 107—108。
- (1977・12) 日本の第四紀とチョウの生物地理。蝶と蛾。28(4): 151—166。
- (1977・12) 堺にあらわれたナガサキアゲハ。ns.23(12): 134—136。
- (1978・1) [藤井俊夫・藤井伸二:「虫の冬ごし観察会に参加して」への] 付記。ns.24(1): 12。
- (1978・2) ナガサキアゲハとミカン。ns.24(2): 4。
- 日浦 [勇] (1978・2) 良書紹介「比和の自然」。ns.24(2): 16。
- 日浦 勇 (1978・3) アオスジアゲハの越冬蛹の転落事故。ns.24(3): 34。
- (1978・3) 現生生物の分布パターンとウルム氷期 [シンポジウム「ウルム氷期以降の生物地理」講演録, 1977年11月, 当館] 第四紀, ④ [=文部省科学研究費補助金総合研究(A) 234053 ウルム氷期以降の生物地理に関する総合研究昭和52年度報告書]: 7—29, 表1。
- (1978・3) [司会] [同上, 総合討論]。同上: 73—79。[発言者: 日浦 勇・樽野博幸・那須孝悌・千地万造ほか*]
- (1978・3) [同上, 鈴木敬治「ウルム氷期後半の植物相と植生について」の講演に対する質問]。同上: 54。
- 宮武頼夫・馬野正雄*(1977・4) 大阪府におけるチャオビフユエダシヤクの新産地。ns.23(4): 46。
- 宮武頼夫・菊池 勝*(1977・5) アキタクロナガオサムシの摂食例。ns.23(6): 64。
- 宮武頼夫 (1977・6) 今月の虫 表紙説明 タガメ。インセクタリアム。14(6): 136。
- (1977・8) [分担執筆] 半翅目同翅亜目(同翅類)。伊藤修四郎・奥谷禎一・日浦勇編著。保育社の原色図鑑3, 原色日本昆虫図鑑(下)。(全改訂新版) 保育社: 130—174, pls.34—40。
- (1977・9) 広島県比和町の同翅半翅類(1)。比和の自然(比和町立科学博物館編): 239—246。
- 宮武頼夫・馬野正雄*(1977・10) 和泉葛城山頂でヤクシマヨトウを採集。ns.23(10): 116。
- 宮武頼夫 (1977・11) 例年より早いイチモンジセサリの移動(その1)。ns.23(1): 124。
- 宮武頼夫・馬野正雄*(1977・11) 長居公園内でアサギマダラを目撃き。ns.23(11): 130。
- 宮武頼夫 (1977・12) ケブカスズメバチがエゾチッチゼミを攻撃。ROSTRIA, ⑧: 228。
- (1978・1) 長居公園の蛾5。キンウワバ類のキクへの訪花。ns.24(1): 10。
- (1978・2) [監修] よくみよう「ふゆごし」。エースひかりのくに, 1978年2月号: 4—7。[関連記事, よくみよう「ふゆごし」。ひかりのくに絵本日より, 1978年2月号: 14]
- (地史研究室)
- 千地万造 (1977・3) [昭和51年度追加] ICOM自然史博物館国際委員会日程 および 概要。博物館研究, 12(3): 7—9。
- (1977・3) [昭和51年度追加] [昭和51年度博物館職員研修会(自然史系), 1976年8月, 当館での開会式および閉会の] 挨拶。昭和51年度博物館研究協議会報告(日本博物館協会): 51—52, 93。
- (1977・3) [昭和51年度追加] [昭和51年度博物館職員研修会(博物館行政), 1976年11月, 岡山, 浅原健「博物館の評価とその方法——アンケートを中心に——」の講演に対する] 講師コメント。同上: 123—124 [討議での発言: p.124]
- 千地万造・紺田 功* (1977・4) [共同分担執筆] [Ⅲ.日本の標準化石(分類別)] 1.有孔虫類 Foraminifera. 森下 晶編。日本標準化石図譜。朝倉書店: 150—151(本文), pls.1—2 (=pp.10—13, 化石図版および説明)
- 池辺展正*・千地万造 (1977・5) 西太平洋地域の新第三系生層序基準面 [英文・講演要旨・プレプリント。1977年5月, インドネシア・バンドン。] [Neogene datum-planes of Western Pacific — a proposal for discussion]。2nd Working Group Meeting, International Geological Correlation Programme (IGCP): 1 p. 2 tables.
- 千地万造 (1977・7) [分担執筆] 第1章大阪盆地の地質(とくに洪積層について)。大阪地盤(土質工学会発行): 1—26。
- (1977・12) 本の紹介 日本の自然。ns.23(12): 140。
- (1977・12) 有孔虫化石群集の分布と環境 [第1回瑞浪シンポジウム, 1977年2月, 講演要旨]。瑞浪市化石博物館研究報告, (4): 149—150。
- (1978・2) [分担執筆] [第2章 思い出の発掘物語] 2日本にも大ワニがすんでいた。野尻湖発掘調査団編著, 井尻正二・星野通平監修, ぼくらの野尻湖人——ジュニアのための発掘ガイドブック——。講談社: 87—98。

千地〔万造〕（1978・3）〔第25回全国博物館大会第1分科会・公立の部、博物館運営に関する分科会、1977年9月、熱海での発言（学芸員採用について）〕。第25回全国博物館大会報告書（日本博物館協会）：54—55。

千地万造（1978・3）能登半島周辺の段丘堆積物中の底棲有孔虫化石群集。第四紀，④〔＝文部省科学研究費補助金総合研究(A)234053 ウルム氷期以降の生物地理に関する総合研究昭和52年度報告書〕：84—86。

石井久夫（1977・8）山の地形を観察しよう。ns.23(8)：95—96。

———（1977・11）新着寄贈標本 南極の石。ns.23(11)：129。

———（1977・12）生駒山地の地形と地質(1)。ns.23(12)：143。

（第四紀研究所室）

石田志郎*・中川要之助*・那須孝悌・西山研グループ*（1976）〔昭和51年度追加〕湖南地域における古琵琶湖層群の層序（英文）〔Stratigraphy of the Kobiwako Group in Konan Area, South of Lake Biwa, Central Japan〕。堀江正治編。文部省特定研究(1)研究論集 Paleolimnology of Lake Biwa and the Japanese Pleistocene, 4：109—124。

那須孝悌（1977・4）日本海をこえてきたマオウ（麻黄）属の花粉。ns.23(4)：41—43。

那須孝悌ほか4名*（1977・9）〔共同分担執筆〕1〔章〕歴史の生き証人。湊正雄監修。日本の自然，平凡社：11—30。〔英文版 Japan and its Nature, Chapter 1. Eyewitness of History：11—30〕

那須孝悌（1977・10）弥生時代の台風——シダ植物 *Stenochlaena* の孢子化石——。ns.23(10)：110—112。

井尻正二*・那須孝悌（1977・12）化石がかたる地球の歴史5 人類の誕生。千代田書房：157頁。

那須孝悌（1978・2）〔分担執筆〕〔第3章 大むかしの生活〕，6新石器時代の気候。野尻湖発掘調査団編著，井尻正二・星野通平監修，ばくらの野尻湖人——ジュニアのための発掘ガイドブック——。講談社：175—184。

樽野博幸（1977・6）ドバトの食べもの。ns.23(6)：66。

———（1977・7）けものの標本の作り方——その1——。ns.23(7)：74—77。

———（1977・7）二上山でコモグラを拾う。ns.23(7)：78。

樽野博幸・那須孝悌ほか2名*（1977・9）〔共同分担執筆〕

6〔章〕日本の平野。湊正雄監修，日本の自然，平凡社：123—138。〔英文版 Japan and its Nature, Chapter 6. Plains of Japan：123—138。〕

樽野博幸（1977・12）国鉄長居駅でホンドイツチを目撃。ns.23(12)：142。

———（1978・3）ウルム氷期の哺乳類相〔シンポジウム「ウルム氷期以降の生物地理」講演録，1977年11月，大阪〕第四紀，④〔＝文部省科学研究費補助金総合研究(A)234053 ウルム氷期以降の生物地理に関する総合研究昭和52年度報告書：55—61〔質問：日浦 勇 p.59〕

Ⅳ 文部省科学研究費をうけて行なった研究

昭和51年8月19日付で，当館は，文部大臣から「科学研究費補助金取扱規程第2条第4号に規定する研究機関」として指定された。52年度には，一般研究(D)の1件が採択された。

■ 特定研究（1）

研 究 課 題	研究代表者	当館の研究分担者
学際研究用データベース・システムの開発と地理学および環境学での応用（「情報システムの形成と学術情報の組織化」の一部）	弘原海清 （大阪市大）	千地万造
縄文時代の低湿性遺跡およびその周辺における埋積地形の実証的研究（「自然科学の手法による遺跡・古文化財等の研究」の一部）	市原壽文 （静岡大）	那須孝悌

■ 総合研究（A）

研 究 課 題	研究代表者	当館の研究分担者
野尻湖周辺の人類遺跡ならびに自然環境に関する総合研究	歌代 勤 （新潟大）	千地万造 那須孝悌 樽野博幸 石井久夫
ウルム氷期以降の生物地理に関する総合研究	亀井節夫 （京都大）	千地万造 日浦 勇 那須孝悌 樽野博幸
太平洋側と日本海側の新第三系の対比と編年	土 隆一 （静岡大）	千地万造 両角芳郎

■ 一般研究 (D)

研究課題	研究代表者	当館の研究分担者
シダ胞子の花粉分析学分野への寄与に関する基礎研究 (課題番号264264)	那須孝悌 (当館)	那須孝悌 瀬戸 剛

表記の課題は昭和50年度より研究を始めたが、昭和52年度には文部省科学研究費の補助を受けて、南方系シダ植物の胞子形態研究に主目標をおき、亜熱帯および暖温帯シダ植物の生態に関する現地調査と胞子標本の採集を行なうとともに、南方系水生シダ植物のミズワラビについて研究した。

調査：

1) 昭和52年7月22日～31日。台湾の烏来・阿里山・溪頭・蓮華池。(全額私費)。2) 10月8日～11日。紀伊半島の尾鷲～新宮間の海岸地域および大塔山大杉谷(全額私費)。3) 10月17日～26日。沖縄県石垣島および西表島(文部省科研費)。

研究：

1) 亜熱帯・暖温帯シダ植物の胞子形態比較観察(成果は昭和55年度に当館収蔵資料目録として発行予定)。2) 現生および化石のミズワラビ胞子の形態研究(自然史博研報, 31号, 1978年3月に発表)。3) 兵庫県下の沖積層より熱帯産ステノクラエナ属の胞子を発見し、同属および近縁属の胞子形態について研究(ネイチャー・スタディ, 23巻, 10号, 1977年10月に発表)。

標本：

現地調査で採集したシダ植物の腊葉標本および胞子標本、研究に使用した胞子のプレパラートはいずれも当館植物標本庫(OSA)に収蔵した。

V その他の総合研究 (51・52年度)

金剛生駒国立公園見直しのための学術調査(昭和51年度)

昭和33年に指定された標記公園を和泉山脈に拡張したいとの大阪府(自然保護課自然公園係主担)の意向により、「自然の貴重な資源の保護と、その調和のとれた利用計画を立案するための基礎資料」の一部として金剛生駒・和泉山脈の学術調査が日本自然保護協会関西支部により、昭和51年に行われた。同支部より調査委員として下記の学芸員が依頼され、調査を行い、本館報7号16～18ページに列挙したような中間報告を行った。本報告はすでに提出済みであるが未だ印刷公表されない。

地形・地質概観及び景観・名勝・文化財・遺跡(千地)、金剛生駒山脈の地質構造と風化(石井)、和泉山脈の岩相層序と産出化石相(両角)、溪流(日浦)、森林昆虫

相(宮武)、岩礁動物相(布村)、両生爬虫類相(柴田)、植物相(瀬戸)、残存照葉樹林の比較(岡本)、森林診断(布谷)、生物概況(日浦・布谷)、地域総括(千地)。

北摂山系学術調査(昭和52年度)

「大阪をめぐる三山系、①北摂、②金剛生駒、③和泉山脈のうち公園行政上手つかずにのこっている①にたいして、民間の開発の手が急速にのびているので、できるだけ早く自然公園に指定することによって自然を守りたい」という大阪府(自然保護課企画調整係主担)の意向により学術調査が日本自然保護協会関西支部によって行われた。同支部より調査分担者として下記の学芸員に依頼があり、調査の結果、中間報告と、本報告を提出した。

両生爬虫類(柴田)、昆虫(日浦・宮武)、区域の位置づけ・特性と課題・土地条件・土地性向(千地)。

国際地質対比計画(International Geological Correlation Programme, IGCP) プロジェクト 114

IGCPとは：

地球は成生以来40数億年の間にさまざまな現象を経ている。類似の現象が世界中にほぼ同時に起こったこともあるし、それぞれ異なる現象が同時に起こったこともある。これらの諸現象を全地球的な規模で統一して理解できるような一般原理を導くために、研究方法や用語の統一のほかに、精密な地質学的研究をもとにして、大陸内または大陸間での正確な地質現象の対比を多数の国の国際協力によってすすめようとするものである。IGCP計画は、地球の表層および内部における地質現象一般を対象として、グローバルな視野から重要な地質現象の時、空間における位相を明確にすることを目標としている。

この計画は最初、1964年にユネスコの地球科学部門の計画の中の最重要項目としてとりあげられ、その後1967年国際地質学連合(IUGS)執行委員会で国際地質対比計画として始めて発議され、各国のIUGSに対応する国内委員会の賛成を得て計画が練られ、1972年、ユネスコとIUGSの合同による国際協力研究事業として正式に発足した。日本では日本学術会議地質学研究連絡委員会の下に1973年1月にIGCP国内小委員会がもうけられ、国際IGCP委員会がたてた研究計画(表1)にそって、国内計画をたてた。その中では日本が占める位置を考慮して、とくに環太平洋又は東アジアに関連したテーマが重視された。

我が国におけるIGCP研究課題：

IGCP計画は国際的な協力研究を目的としているの

表 1

第1部門 時間と層序：その実際的应用	
トピックス	層序学の原理とその共通語 層序学対比の方法論 全地球的な時代層序学的主要区分の 標準定義
第2部門 時間空間別にみた主な地質学的事象とそ れらの環境変化への応用	
トピックス	侵食・堆積作用及び気候的・生物的 変化のパターン 全地球的及び地球外諸過程に関連す るパターン
第3部門 時間空間別にみた鉱床分布と鉱床形成と 他の事象との関連	
トピックス	堆積岩中の燃料その他の有用鉱床 火成活動に関係ある有用鉱床 造構運動に関係ある有用鉱床 風化作用に関係ある有用鉱床
第4部門 地質対比における定量的方法とデータ 処理	
トピックス	標準化と自動データ処理, 数理地学 的方法

で、各国において独自に研究計画をたて、独自に研究を進めるのではなく、IGCP Board の承認を得たものについて、各国研究者の協力の下に研究を進めることになっている。したがって、表1のような研究計画の枠組の中で、日本として貢献できるテーマを提案し、承認されたものは各国研究者の参加を求めて研究組織をつくり、研究を進めるわけである。また、外国の研究者が提案して承認されたテーマで我が国がとくに協力できるものについてはIGCP国内小委員会ではそれに対応する研究組織をつくり研究を進めている。さらに、研究者個人として海外の研究プロジェクトからの要請によって参加している人もある。

日本のIGCP国内小委員会によってつくられた国内研究推進のための研究組織は次の通りである。

I 部門 (大森昌衛)	{	新第三系 (地磁気を含む) (池辺展生)
		新三系/第四系境界 (市原 実)
		完新世海水面 (吉川虎雄)
		テフロクロノロジ (勝井義雄)
II 部門 (木村敏雄)	{	オフィオライト (勘米良亀齢)
		プルートニズム (牛来正夫)
		白亜紀中期 (松本達郎)
		二畳/三畳紀境界 (中沢圭二)
		珪質堆積物 (飯島 東)
		タービダイト (岡田博有)
		古生代造山 (湊 正雄)

III 部門 (立見辰雄) 酸性マグマ (石原舜三)
カオリン (湊 秀雄)

IGCP 114:

現在 IGCP Board において採択され、世界各国で行われている研究は全部で64テーマである。各テーマ毎に各国の関係研究者によって国際的なプロジェクト・チームが組織され、リーダーがそのチームの研究実施に責任をもち、チーム毎に事務局がその組織のとりまとめをしている。IGCP 114は日本のIGCP国内小委員会から提案し採択されたプロジェクトの1つで、代表者 (Leader) 池辺展生 (大阪市立大学名誉教授) 総務幹事 (Secretary) 千地万造 (大阪市立自然史博物館) の下に、「Evaluation of biostratigraphic datum-planes of the Pacific Neogene for the purpose of global-scale correlation (地球規模の対比のための太平洋地域新第三系における生層序学的基準面の評価)」をテーマとしたプロジェクトである。ワーキング・グループは43名のメンバー (日本: 10名, チリ: 1名, アメリカ合衆国: 9名, カナダ: 1名, ソ連: 2名, 韓国: 3名, 台湾: 3名, フィリピン: 1名, インドネシア: 2名, オーストラリア: 3名, ニュージーランド: 3名, インド: 2名, 英国: 3名) で構成されていて、有孔虫、珪藻、ナンノプランクトン、放散虫などの微化石、貝化石を主とする生層序学部門の研究者と、岩石の放射年代学に関する研究者が参加している。

これとは別に国際地質学連合には層序学委員会 (Commission on Stratigraphy) の小委員会として太平洋地域新第三系層序学小委員会 (Regional Committee on Pacific Neogene Stratigraphy, 略称 RCPNS) があり、日本学術会議と共催で第1回太平洋地域新第三系国際会議を1976 (昭和51年) 5月17日~21日東京で開催した。IGCP 114の研究テーマはこの会議のテーマの中の1つとして含まれているので、会期中に第1回の国際ワーキング・グループの会合をもち、今後の研究の進め方について討議が行われた。第2回の会合はバンドンでインドネシア地質調査所がホストとなって、1977年6月30日~7月1日に開かれ、「西太平洋地域の新第三系の主要な生層序基準面の改訂」をテーマとして、参加者からの研究報告と全体的な討論がもたれ、同時に、ワーキング・グループ・メンバーによる事務局会議で今後の方針が話し合われた。その後7月2日~7月6日に西部ジャワ地域 (バンドン~ジャカルタ間) および中部ジャワ地域 (ジョクジャカルタ周辺) の第三紀層についての現地討論と資料採取が行われた。参加者数: 50名 (インドネシア: 28, 海外: 22), 講演数: 15

資料収集保管事業

展覧事業および調査研究事業の目的でのべた方針のもとに、大阪を中心とした地域にはじまり、可能な範囲の自然界の諸物質を収集し、「文化財産」として永久に保管するとともに、必要に応じて研究・展覧・教育活動の利用に供することを目的とする。

I 主な購入標本

■地史研究室

エジプト産貨幣石化石	1点	31千円
田辺層群産キリガイダマン化石	1点	34千円
レリーフマップ（立体地図近畿版）	1点	19千円

■昆虫研究室

小島コレクション（カシキリムシ）	5,000点	1,000千円
マレーシア産セミ標本	70点	150千円
メキシコ・中央アフリカ産セミ標本	45点	100千円

II 寄贈標本及び収集標本

■地史研究室

（1）寄贈標本

天保山ボーリングコア中の有孔虫	86点	古谷 正和氏
和泉層群産二枚貝化石	1点	矢倉 周次氏
可児サイ下顎骨化石（レプリカ）	1点	

朝日新聞社大阪本社企画部

マダガスカル産イノセラムス化石（石膏模型）	11点	野田 雅之氏
-----------------------	-----	--------

宮崎県産シルル紀クサリサンゴほか化石・鉱物標本	8点	益富寿之助氏
-------------------------	----	--------

藤原層群産キリガイダマン化石	1点	松岡 数充氏
淡路島産イノセラムス	1点	谷 雅則氏

和泉層群産不明化石	1点	清水 千尋氏
兵庫県多紀郡上笠見産珪石	3点	西川 喜朗氏

“ 下笠見産珪石	1点	“
----------	----	---

大江山産蛇紋岩	1点	“
---------	----	---

南極昭和基地産ザクロ石片麻岩	1点	田辺 元起氏
神岡鉱山産方鉛鉱	1点	矢田 博士氏

球類流紋岩	1点	岩路 慶甫・森田 天三氏
ベニガラなど	12点	古橋 文男氏

（2）館員による主な採集

担当学芸員が行った採集は次のとおり（採集を伴わない出張は除く。カッコ内は担当者，C：千地，M：両角，I：石井）。

5月4～7日 富山県氷見市 微化石試料（M）

5月14日 大和葛城山 岩石（I）

5月17日 千早赤坂村 岩石（I）

5月20～6月7日 インドネシア 化石（C）

6月26日 新潟県西山油田地域 微化石と岩石（M）

7月15日 貝塚市蕎原 和泉層群化石（M・I）

8月8日 札幌市 有珠山火山灰（I）

8月19日 長崎県佐世保市 岩石（I）

9月1日 橋本市菖蒲谷 和泉層群凝灰岩（M）

9月4日 河内長野市 岩石（I）

11月30日 大阪湾底質（M・山西）

11月21～24日 富山県氷見市 微化石試料（M）

2月5日 神戸市名谷 植物化石（I・M・岡本）

2月20～24日 鹿児島県下甕島 白亜紀化石（M）

3月16～19日 三重県名張市 室生岩石（I）

■第四紀研究室

（1）寄贈標本

大島産タスキ	8点	山口県大島郡橋町役場
木曾駒ヶ岳産アズミトガリネズミ	1点	桂 孝次郎氏
台湾溪頭産ジネズミ	3点	桂 孝次郎・春沢圭太郎氏
富山県小矢部市嶺産コキクガシラコウモリ	5点	西川 喜朗氏

青森県中津軽郡間山廻振産アカネズミ	1点	桂 孝次郎氏
-------------------	----	--------

箕面市箕面公園産ノウサギ骨格	1組	岡田 康稔氏
川西市中央町産ホンDOIタチ	1点	道盛 正樹氏

八尾市若林町産ホンDOIタチ	1点	松谷 武司氏
堺市浜寺石津町産チョウセンイタチ	1点	田中 仁郎氏

八日市市如来産チョウセンイタチ	1点	西川 喜朗氏
瑞浪市稲津町中屋敷産キツネ	1点	古谷 正和氏

洲本市由良産トラフズク	1点	田中 貞之氏
京都府相楽郡精華町祝園産コイ	1点	柴田 始氏

（2）館員による主な採集		
--------------	--	--

担当者名はN：那須孝悌，T：樽野博幸と略す。

4月10日 東住吉区大和川川床：植物・昆虫化石採集（N・T）

5月20日 平野区長古城山地質調査：動物標本採集（N・T）

6月19日 京都市深泥池・宝ヶ池周辺の植生調査：花粉標本採集（N）

6月22日 和泉葛城山動物相調査（T）

7月22～31日 台湾烏来・阿里山・溪頭・蓮華池のシダ植物孢子・花粉標本採集（N）

8月4日 岸和田市内畑 地質調査：礫採集（T）

8月14日～16日 兵庫県東城湖周辺：花粉標本採集（N）

8月29日～31日 福井県三方五湖周辺植生調査：花粉標本採集（N）

8月31日 泉南郡岬町 地質調査：礫採集（T）

9月6日 高槻市北方：花粉標本採集（N）

9月25日 伊丹市田能 地質調査：化石採集（N・T）
 9月28日 東大阪市水走 地質調査：化石採集（N・T）
 10月2日～4日 福井市浜島 花粉標本採集（N）
 10月8日～11日 紀伊半島尾鷲一新宮間・大塔山植生調査：シダ植物孢子・花粉標本採集（N）
 10月17日～26日 沖縄県西表島・石垣島シダ植物調査（文部省科学研究費補助金一般研究D：瀬戸学芸員と共同研究）：シダ植物孢子・花粉標本採集（N）
 10月22日～31日 福島県田村郡滝根町地質調査：洞穴産化石採集（T）
 11月8日～14日 東大阪市水走地質調査：ボーリングによる試料採集（N・T）
 2月23日，3月16日 東大阪市弥生町：鬼虎川遺跡地質調査：化石採集（N・T）

■動物研究室

（1）寄贈標本

沖縄本島産蛙	6点	田中 聡氏
三重県産爬虫両生類	12点	富永 修氏 桂 孝次郎氏
彦岐産魚類・両生爬虫類	6点	池崎 善博氏
コイワシクジラ胎児	1点	前田 修次氏
イングランド産ヘビ	1点	西川 喜朗氏
台湾産両生爬虫類	54点	台湾採集団殿
大阪産両生爬虫類	4点	春沢圭太郎氏
滋賀県産両生類	3点	桂 孝次郎氏
福島・山形県産有尾類	5点	西川 喜朗氏
岡山県産ヤマアカガエル	1点	土井仲治郎氏
対馬産両生爬虫類	8点	富永 修氏
四条畷産淡水魚（ブルーギルなど）	5点	土井仲治郎氏
福井県産アマガエル・京都府産 ヤマカガシ	2点	西川 喜朗氏
各地産カエル	14点	富永 修氏
沖縄本島産ホルストガエル	1点	当山 昌直氏
各地産両生爬虫類	3点	西川 喜朗氏
各地産両生類	7点	春沢圭太郎氏
交野市産ヘビ	2点	景森 紀子氏
青森県産カエル	6点	道盛 正樹氏 桂 孝次郎氏
各地産両生爬虫類	17点	富永 修氏
西表産両生爬虫類	3点	粉川 昭平氏
長崎・熊本両県産両生爬虫類	5点	春沢圭太郎氏
各地産両生爬虫類	3点	西川 喜朗氏
各地産両生爬虫類・淡水魚	15点	富永 修氏
徳之島産両生爬虫類	22点	宇都宮妙子氏

各地産両生爬虫類	20点	富永 修氏
各地産両生爬虫類	6点	春沢圭太郎氏
各地産両生爬虫類	8点	桂 孝次郎氏
奈良県産タゴガエル	1点	土井仲治郎氏
爬虫類各地産	11点	原 幸治氏
和歌山県産シロマダラ・ヒバカリ	2点	玉井 済夫氏
和歌山県産カスミサンショウウオ	1点	今岡 亨氏
香川県産ヤギ類	1点	布施慎一郎氏
香川県産イシガニ	1点	布施慎一郎氏
鳥取市産多毛類	1,828点	桑村 哲生氏
摂津市産マルドブガイ	2点	友野 庄平氏
岡山県産多毛類	1点	桑村 哲生氏
和歌山県産陸貝	1点	西川 喜朗氏
串本産陸貝	2点	富永 修氏
淀川産オグラヌマガイ	1点	紀平 肇氏
鹿児島県産底生動物	454点	今岡 亨氏
奄美大島産陸生等脚類	3点	富永 修氏
青森県産淡水エビ	7点	西川 喜朗氏
和歌山県白浜町産多毛類	5点	P.V.Bhavaranyana 氏
ブラジル産ツリミミズ類	2点	渡辺 弘之氏
若狭湾産多毛類	47点	横山 寿氏
マイワシに寄生するウオノエ類	1点	柴田 和子氏
徳之島産ヤマタニシ類	2点	宇都宮妙子氏
和歌山県白浜産ヨウラククラゲ類	2点	今岡 亨氏
和泉市産陸貝	7点	春沢圭太郎氏
大分市産間隙生多毛類	30点	酒井 保次氏
ベーリング海産タラバガニ	1点	志立 隆三氏

（2）主な収集標本

大阪湾沿岸各地へ6回出かけ，岩礁海岸，人工海岸，砂浜に産する無脊椎動物 354点を採集。
 和歌山県白浜町へ2回出かけ，海産無脊椎動物71点を採集。一部は潜水による。
 天草産両生爬虫類 177点

■昆虫研究室

（1）寄贈標本

マレー・シンガポールのトンボ	87点	岡島 秀治氏
アリ同定標本（タイプ標本含む）	11点	田中 将宏氏
ニューキャレドニア産セミ	2点	藤田 安見氏
但馬地方産昆虫	100点	谷 幸三氏・桂孝次郎氏
各地産オサムシ	14点	西川 喜朗氏
ヒメタイコウチ（西宮市産）	1点	法西 定雄氏
鳥取県産トンボ	654点	衣笠 弘直氏
台湾・マレーシア甲虫同定標本	613点	芝田 太一氏
東京八王子産昆虫	100点	西川 喜朗氏
ドイツ産甲虫同定標本	102点	西川 喜朗氏

外国産直翅類他	72点	伊賀 正汎氏
北海道産チョウ・ガ	19点	外崎 誠氏
福井県産蝶・トンボ他	137点	富永 修氏
大阪府三島郡島本町の昆虫	8点	上田 俊穂氏
和泉葛城山産ヒメヒカゲ	5点	桜井 正臣氏
日本産セミ	10点	林 正美氏
東南アジア・日本産蝶他	185点	木下總一郎氏
奈良県産昆虫	16点	土井仲治郎氏
小笠原産アメンボ	1点	湊 宏氏
イエシロアリの巣	1点	荒木 裕氏
関東・東北地方産昆虫	171点	西川 喜朗氏
滋賀県・福井県産昆虫	107点	富永修氏・桂孝次郎氏
東南アジア産蝶	230点	木下總一郎氏
イエシロアリ・ヤマトシロアリ他	16点	荒木 裕氏
日本産キジラミ	273点	上宮 健吉氏
日本産・外国産蝶	1,006点	小野山 充氏
日本産・台湾産蝶	796点	花田 勝治氏
キイロスズメバチの巣	1点	谷川 武男氏
大阪産・佐賀産蛾	67点	後藤 光男氏
近畿・山形産昆虫	45点	西川 喜朗氏
松山産キジラミ	44点	牛島弘一郎氏
広島県産ムラサキシタバ	1点	吉原 順氏
西表島の昆虫	228点	粉川 昭平氏
与那国・波照間の昆虫	80点	南木 睦彦氏
中部・東北地方の昆虫	300点	春沢圭太郎氏
河内長野市産昆虫	200点	春沢圭太郎氏
生薬用シナゴキブリ・サツマゴキブリ	6点	勝城 忠久氏
ヨーロッパ・アメリカのトンボ	19点	井上 清氏
ガロアムシ	3点	西川 喜朗氏
新潟・山形産昆虫	200点	富永 修氏
韓国産オサムシ・ニイニイゼミ	33点	若林 守男氏
各地産ハサミムシ	22点	富永 修氏
スジボソギンヤンマ	2点	木村 輝夫氏
韓国産オサムシ	31点	若林 守男氏
ヒナカマキリ	2点	五十嵐英二氏
日本産カマキリムシ他	511点	小島 圭三氏
高知県産糞虫	4,476点	山下 泉氏
九州・中国地方産昆虫	100点	春沢圭太郎氏
屋久島産クロイワツクツク	5点	有田 豊氏
タンザニア産セミ・甲虫	6点	瀬野 直人氏
野尻湖畔の昆虫	20点	桂 孝次郎氏
和歌山県産トンボ	3点	高松 勉氏

(2) 館員による採集と主な収集標本

日本産昆虫の平均的収集, 大阪産昆虫の完全な収集等

の目的で, 担当な芸員(日浦・宮武)が行なった出張は次の通りである。便宜上, 調査研究のための出張および普及行事やその予備調査の際の出張をも含めて記述する。(担当者名は, H:日浦, M:宮武と略記する。)

4月2日	二上山	チョウ調査(H)
4月5・19・21・22日	大和葛城山	チョウ調査(H)
4月10日	矢田大和川	一般昆虫(H)
4月21日	和泉市七越峠~三国山	一般昆虫(M)
5月3日	金剛山	夜間採集(M)
5月9日	奈良市弘仁寺	ハルゼミ等(M他)
5月21日	大和葛城山	一般昆虫(H)
5月26日, 6月16・21日	二上山	マツクイムシ(H)
6月22日	犬鳴~和泉葛城山	特展資料収集(H・M)
7月3日	妙見山	一般昆虫(H)
7月11日	橿原市見瀬町	夜間採集(M)
7月23日~28日	台湾	鳴く虫・一般昆虫(H)
7月24日	奈良公園	セミ類(M・馬野)
7月27日	金剛山	セミ調査(M)
8月4日~6日	北摂山地(本山寺・ポンポン山・妙見山・妙見奥ノ院・深山・剣尾山・大野山・三草山)	セミ調査(M・馬野)
8月13日~14日	茨木市竜王山	一般昆虫(H)
8月18日	吉野山	一般昆虫(M)
8月20日	長居公園臨南寺	昆虫調査(H・M)
8月23日~24日	金剛山	一般昆虫(H)
8月25日~27日	茨城県筑波山	セミ・一般昆虫(M)
8月28日~29日	小樽市忍路	セミ・一般昆虫(M)
9月8日	和歌山県有田郡広川	夜間採集(M)
9月11日	二上山	セミ等(M)
9月15日~17日	対馬	鳴く虫・一般昆虫(H)
9月25日	伊丹市原田遺跡	昆虫遺体(H・M)
10月23日	貝塚市蕎原	一般昆虫(M)
11月9日	河内長野市天見	一般昆虫(H・M)
11月15日~23日	沖縄本島	鳴く虫・一般昆虫(H)
12月4日	河内長野市天見	越冬昆虫調査(H・M)
1月4日~5日	能勢町	越冬昆虫調査(H)
1月27日~2月3日	東ジャワ; 2月7日	シンガポール; 2月8日~12日
	マレー・キャメロンハイランド; 2月15日	香港
		特別展資料収集(M・馬野)
3月25日	長野県野尻湖畔	越冬昆虫(H・M)
3月26日~31日	野尻湖湖底発掘	昆虫遺体(H・M)

■植物研究室

(1) 寄贈および交換(*)標本

三重県度会郡玉城町産カンアオイ属およびタンポポ属

2点 富永 修・桂 孝次郎氏

* 日本産植物標本 100点

金沢大学理学部植物学教室腊葉庫

日本産スミレ属標本	27点	牧 嘉裕・福井敏勝氏
日本産シダ植物	39点	吉川 直人氏
屋久島産シダ植物	21点	村田 章氏
大阪府および鹿児島県産植物標本	5点	清水 千尋氏
高知県産植物標本	13点	岡村 信夫氏
日本産シダ植物標本	16点	生田 耕蔵氏
和歌山県産ミゾシダモドキ標本	1点	真砂 久哉氏
滋賀県産オニノヤガラ	1点	西川 喜朗氏
トウキョウウイノデ・シムライノデ標本		

2点 生田 耕蔵氏

日本産蘇類標本 約300点 中島徳一郎氏

〃 維管束植物標本 約200点 〃

台湾産シダ植物標本 36点 御影 雅幸氏

* 日本産植物標本 100点

金沢大学理学部植物学教室腊葉庫

大阪府箕面および兵庫県三川山産標本

30点 梅原 徹氏

青森県・新潟県産バシクルモン標本 2点 武内 康義氏

三重県産トキソウ 1点 加納 康嗣氏

奈良県産シダ植物標本 14点 辻本 善次氏

台湾産 *Paesia* および *Amentotaxus* 標本

2点 謝 萬権氏

近畿地方産植物標本 17点 桑島 正二氏

鹿児島県串木野産カンラン標本 1点 川上 政子氏

イチョウ樹幹標本 1点 生田 耕蔵氏

台湾産植物標本 40点 小山 良氏

日本産植物標本 66点 富士本久登氏

西ドイツおよびイギリス産植物標本 10点 西川 喜朗氏

日本産菌類標本 58点 上田 俊穂氏

* 日本産植物標本 200点 黒崎 史平氏

大阪府箕面ダム建設に関する自然環境調査資料標本

285点 大阪府北部ダム建設事務所

大阪府産植物標本 5点 中西 定雄氏

日本産スミレ属植物標本 15点 牧嘉裕・福井敏勝氏

イワガネゼンマイ奇型標本 1点 白岩 卓己氏

日本産シダ植物標本 26点 古川 直人氏

大阪府産ヌマガヤツリ標本 1点 横山 浅子氏

ヒメミズニラ・エゾノミズタデ標本 2点 粉川 昭平氏

和泉葛城山産フジテンニンソウ標本 1点 豊原 稔氏

日本産植物標本 20点 松本 邦夫氏

日本産シダ植物標本 64点 富士本久登氏

大阪府泉南産フウラン 1点 山本 雅雄氏

西宮市産オニフスベ 1点 板倉 賢治氏

和歌山県産シダ植物標本 10点 真砂 久哉氏

富山県・岐阜県産エチゴツルキジムシロ標本

4点 鳴橋 直弘氏

和歌山県高野山附近の植物標本 7点 山元 晃氏

長野県産カノツノタケ標本 1点 上田 俊穂氏

大阪府金剛山麓産シダ植物標本 40点 富士本久登氏

和歌山県産植物標本 80点 中嶋 章和氏

シダ植物標本 2点 真砂 久哉氏

和歌山県産シダ植物標本 2点 大洞 浩一氏

三重県産ツチトリモチ 1点 樋口 雄一氏

京都府産シダ植物標本 1点 加藤 芳一氏

日本産シダ植物標本 約50点 生田 耕蔵氏

* 日本産植物標本 115点 黒崎 史平氏

日本産海藻標本 2箱 山本 虎夫氏

近畿地方産シダ植物標本 52点 生田 耕蔵氏

近畿地方産植物標本 約390点 西川 一郎氏

雄国産ウリ類果実製容器 1点 西出 美知氏

奈良県産シダ植物標本 130点 生田 耕蔵氏

* 伊豆八丈島・青ヶ島産植物標本

119点 京都大学理学部植物学教室腊葉庫

紀伊半島産シダ植物標本 約120点 生田 耕蔵氏

* 日本およびブラジル産植物標本 108点 花明山植物園

大阪大学薬学部薬草園栽培植物標本 33点 山中 雅也氏

* 日本産植物標本 92点

金沢大学理学部植物学教室腊葉庫

和歌山県産 *Colysis* 標本 1点 撫養 恒夫氏

近畿地方産スミレ属標本 3点 福井 敏勝氏

和歌山県産カワズカナワラビ標本 1点 大洞 浩一氏

三重県産カワズカナワラビ標本 2点 村田 章氏

奈良市産ミツイシイノデ標本 2点 辻本 善次氏

紀伊風土記丘栽植ハギ属標本 4点 中村 正寿氏

大阪府および隣県産植物標本 23点 桑島 正二氏

* 日本産植物標本 100点

金沢大学理学部植物学教室腊葉庫

* 日本産植物標本 144点 山口県立山口博物館

和歌山県産ヒメマツバボタン 1点 山本 虎夫氏

大阪府・和歌山県産シダ植物標本 8点 生田 耕蔵氏

四国産植物 3点 西川 喜朗氏

紀伊半島シダ植物 13点 大洞 浩一氏

(2) 館員による採集 (おもなもののみ、担当者名はS

: 瀬戸, O: 岡本, N: 那須と略記する。*印は館員外)

4月4日 京都府相楽郡祝園附近木津川河川敷 (S) ヤ

ナギ属 20点

4月14日 奈良県橿原市・大和高田市 (日浦) ヤナギ属

など 9点

資料収集保管事業

4月21—23日 岡山県新見市周辺（S）種子植物約50点
 4月28—5月4日 鹿児島県屋久島（O）種子植物約200点
 5月3—4日 兵庫県城崎郡三川山・美方郡氷ノ山附近（日浦・桂孝次郎*）種子植物78点
 7月23—29日 台湾（烏来・阿里山・溪頭・蓮華池）（S・O・N）シダ植物約300点 種子植物200点
 8月21—22日 富士山周辺（S）約150点
 10月18—25日 沖縄県西表島・石垣島（S・N）約200点
 10月30日 京都府相楽郡祝園附近木津川河川敷（S）ヤナギ属 30点
 11月3日 宝塚市生瀬武庫川河川敷（S）ヤナギ属20点
 11月15日 西宮市・尼崎市武庫川河川敷（S）ヤナギ属 16点
 12月3—4日 和歌山古座川町（S）約40点

Ⅲ 現有資料数

■地史研究室（登録済標本数）

	51年度末	52年度末
岩 石	791	845
鉱 物	1,414	1,424
外国産化石	364	376
古生代化石	117	118
中生代化石	1,456	1,458
第三紀化石	936	942
有孔虫等微化石	13,800	13,800
（計）	18,876	18,963

■ 第四紀研究室（登録済標本数）

第四紀化石	2,397
現生哺乳類	137
現生植物の木材	162
現生シダ植物孢子	278（種）
現生花粉	728
計）	3,702

■ 動物研究室

未登録標本を含む	51年度末	52年度末
海綿動物	40	50
腔腸・有櫛動物	300	430
扁形・紐形動物	70	130
触手動物	100	100
環形動物	250	2,390
甲殻類	3,700	3,880

軟体動物	11,800	11,900
棘皮動物	630	810
原索動物	630	220
その他無脊椎動物	500	550
魚 類	2,300	2,300
両生類*	5,389	5,805
爬虫類*	1,419	1,531
鳥 類・哺乳類	530	530
（計）	27,208	30,626

*は登録済

■ 昆虫研究室（未登録を含む）

標本総計 176,774点（昭和52年度末の標本数）

（日本産 118,491点，外国産 58,283点）

内訳：

日本産昆虫

Plecoptera カワゲラ目	191
Odonata トンボ目	6,019
Mantodea カマキリ目	145
Orthoptera 直翅目	2,328
Phasmida ナナフシ目	108
Dermaptera ハサミムシ目	262
Grylloblattodea ガロアムシ目	16
Blattaria ゴキブリ目	138
Isoptera シロアリ目	37
Embioptera シロアリモドキ目	25
Psocoptera チャタテムシ目	129
Heteroptera 異翅類（カメムシなど）	15,956
Homoptera 同翅類（セミなど）	7,220
Neuroptera 脈翅目	413
Mecoptera シリアゲムシ目	1,230
Trichoptera トビケラ目	687
Heterocera 蛾（ガ）	9,358
Rhopalocera 蝶（チョウ）	18,701
Coleoptera 甲虫目	34,051
Diptera ハエ目	4,648
Hymenoptera ハチ目	4,309
その他（各目）	12,520
（計）	118,491

外国産昆虫

蝶（チョウ）	24,865
蛾（ガ）	1,135
甲虫	2,269
同翅亜目（セミなど）	3,561

異翅亜目（カメムシなど）	427
直翅目	340
トンボ	802
その他	470
南太平洋学術調査コレクション	4,700
田中竜三氏コレクション（日本産含む）	12,439
韓国産昆虫コレクション（西川・桂・富永氏採集）	1,506
アフガニスタン蝶（有田豊氏他）	5,168
アフガニスタン昆虫（蝶以外、有田豊氏他）	601
（計）	58,283

■植物研究室

種子・シダ植物腊葉標本	59,900
布藤コレクション（主として管束植物）	40,000
蘇類標本	32,700
苔類標本	23,000
地衣類標本	330
海藻標本	11,340
菌類標本	260
（計）	167,530

Ⅲ 自然史図書の収集

自然史に関する普及図書・専門図書の収集は、当館の活動にとって、各専門分野の資料収集とともに、欠かせないものである。このうち、専門図書類は主として書庫や各研究室に、最近の普及図書は主として普及センターに配置されている。普及センターに配置の図書は、学芸員の指導で、入館者が閲覧できるが、その他の図書の閲覧・リファレンス・コピーなどのサービスは、専任職員（司書）が不在の現状では、不可能である。

■図書購入費による購入（寄贈を含む）

52年度までの3年間を示した。移管は中央図書館より、寄贈は研究者・蔵書家・著者・支持者等による。図書購入予算については、別項(28ページ)を参照のこと。

年 度	購 入	寄 贈	移 管	計
50	689	34	31	754冊
51	555	2	—	557冊
52	337	43	—	380冊

■ 消耗品費による購入

次の雑誌を購入した。

国内：自然・科学朝日・科学の実験・遺伝・採集と飼育・科学・アニメ・週刊朝日百科 世界の植物。

国外：Copeia, Curator, Evolution, Journal of Paleontology, Pacific Science, Pacific Insects, Systematic Zoology（以上アメリカ）、Geological Magazine（イギリス）、Taxon（オランダ）。

■学会への加入による会誌の収集

原則として、会員として加入しない限り会誌が入手できない学会が多数あり、その内下記の16学会に、館が団体会員として加入して、会誌の配布をうけている。また、学会の中には当館出版物との交換を行なっているものも多く、それらは次項に含まれている。

日本応用動物昆虫学会（日本応用動物昆虫学会誌、Applied Entomology and Zoology）

日本動物学会（動物学雑誌）

日本生態学会（日本生態学会誌）

日本生物地理学会（日本生物地理学会会報）

日本衛生動物学会（衛生動物）

日本魚類学会（魚類学雑誌）

日本植物学会（植物学雑誌）

日本遺伝学会（遺伝学雑誌）

日本藻類学会（藻類）

日本陸水学会（陸水学雑誌）

日本地質学会（地質学雑誌）

日本第四紀学会（第四紀研究）

日本古生物学会（日本古生物学会報告・紀事）

日本地学研究会（地学研究）

日本博物館協会（博物館研究）

全国科学博物館協議会（全科協ニュース）

外国にも同様な学会が多数あり、当館の諸活動に欠かれない会誌が多数あるが、当面の予算規模では入会不可能で、大きな問題として残っている。

V 文献交換状況

■ 交換・受贈による雑誌類の受入れ状況

（昭和53年3月31日現在）

当館では、研究報告・自然史研究・収蔵資料目録・館報・Nature Study などとの交換として、国内外の文献収集を行っている。昭和52年度の受入れ冊数は、4,072冊、冊数の累計は41,268冊となった。

■ 研究報告(Bulletin)第30号、自然史研究(Occasional Publications) 1巻11号・12号の配布状況

国内配布数	266カ所	269部
国外配布数	69カ国	481カ所 485部
計	747カ所	754部

なお、国内外9配布先より選んで、国内152カ所（155部）、国外194カ所（197部）に自然史研究を配布した。

■ 収蔵資料目録第10集・館報第7号・Nature Study

の配布状況

(1) 収蔵資料目録の配布先

国 内	35カ所		
国 外	10カ国	22カ所	計 57カ所

(2) 館報の配布先

国 内	402カ所		
国 外	4カ国	8カ所	計 410カ所

(3) Nature Study 配布先

(Vol. 23, No.4 ~ Vol. 24, No.3)

国 内	154カ所		
国 外	8カ国	15カ所	計 169カ所

■ 上野益三博士コレクション（図書）の受贈

豊中市在住の動物学者、上野益三氏より多数の自然史に関する図書・文献の寄贈をうけた。その内訳は、単行本36冊、雑誌バックナンバー114冊、別刷628冊 計778冊にのぼる。

Ⅵ 収蔵資料目録の発行

当館の収蔵資料を公表し、その情報を広く利用してもらうため、昭和43年度から年1回刊行している。昭和52年度においては、三木茂博士寄贈標本（古植物の液浸標本とプレパラート・現生植物プレパラート・現生水草腊葉標本など）のうち整理の進んだ水草腊葉を目録とし、編纂には当館学芸員瀬戸剛があった。これは博士の名著「山城水草誌」の裏付となるものである。

■ 大阪市立自然史博物館収蔵資料目録 (Special Publication from the Osaka Museum of Natural History)

第10集、瀬戸 剛（編）三木茂博士寄贈水草腊葉標本目録。1図版42頁。

普及教育事業

普及教育活動は博物館にとって要ともいえるべき活動であるといわれている。博物館を利用しようとする幅広い層の人達が求める多様な要求は、主として博物館の普及活動に集中しており、博物館ではその要求に答え、展示を通して、あるいは野外や室内での行事によって、自然に目を向け、関心を持ち、自分で調べる機会を提供し、自然とはどのようなものであるかを考えてもらおうとしている。しかしこれは単に理科教育の延長線にあるものではなく、博物館という施設に固有の教育活動であり、博物館が行っている仕事（資料収集、整理・保存、研究、普及教育）の中に位置づけられ、総合的に行われるべきものである。すなわち、普及活動は学芸員の行なう研究活動の成果の上に立って行われ、その研究は主として博物館の収蔵資料と野外調査にもとづいて行われる。決して普及活動だけがひとり歩きするものでなく、基本は資料を軸とした「博物館活動」にある。

自然観察ということは矛盾した点を持つと考えられる。すなわち、一面では予備知識なしでも自然を自分の目で確認してゆくということがあり、また一方では、多くの知識があればあるほど、内容はより豊かになり、収獲も大きい、という点である。したがって、どういう知識量、興味段階の人もそうする気持ちさえあれば自然観察はできるということになるが、自然観察あるいは自然教育をどうすすめるかを考え、実践してきた博物館の普及活動は、それぞれの段階の人が常に一步先へ進みうるような教材例を作り、指導方法を開発してゆくことに重点を置くべきではないだろうか。これが、普及活動が常に

研究活動にささえられていなければならないと考える理由のひとつである。したがって最初の言葉を言い替えるなら、博物館の普及活動は博物館が行なう総合的な活動を反映しており、この活動を通して、一般市民に博物館がためされる、ということになるだろう。文献の紹介や調査研究の相談、同定の依頼など、より高いレベルの知識を要求する人に対しても基本的には同様であるが、学芸員個人の研究活動と重複してゆくことも多い。サークルへの参加・指導はその例である。

52年度の普及活動も、できるだけ多様な層を対象にしつつ、指導者層を意識して行われた（館報7号 p.27 参照）。昨年と変わったところは、2年間続けてきた「昔の生活シリーズ」を止めたことと、自然史講座を4回連続で行なったことである。「昔の生活シリーズ」は評判が良く、効果もあり、なによりも非常におもしろかったが、どうしても技術に目が行きがちであった。このような行事こそ新しい工夫が必要であるが、それもむづかしく、同じ事をくりかえすのをさけるため中止となった。自然史講座のような室内の講義だけの行事は、これまでできてきたが、今回は講座内容をかなり程度の高いものにして行なった。途中で来なくなる人も少なく成功であったと思う。このような室内の行事は希望も多く、これからどうするか考える必要がある。個々の行事は、それぞれ工夫もされ、評判は良かったが、参加人数は全体に少ない。指導できる人数という面から見ればすでに限界であるが、含まれる問題は多い。

I 野 外 行 事

テ　　マ	行　事　名	年　月　日	場　所	対　象	参　加　数
地　域　自　然　史 シ　リ　ー　ズ	槇　尾　山	52年4月24日	側　川～槇尾山	小4年生以上	82人
	多　奈　川　東　川	〃　6月19日	多奈川～孝　子	〃	60
	紀　見　峠	〃　9月4日	紀　見　峠	〃	55
	蕎　　原	〃　10月23日	岸和田市　蕎原	〃	130
自　然　観　察　会	春の野のクズ	〃　5月15日	和泉市　信太山	〃	25
	森の観察会	〃　6月26日	宝塚市　中　山	〃	69
	セミの観察会	〃　7月24日	奈　良　公　園	〃	31
	河口の堆積物	〃　7月31日	泉南市　樽　井	〃	25
	木の実のゆくえ	〃　11月6日	能　勢　初　谷	〃	15
	冬の生物	〃　12月4日	河内長野市天見	〃	17
	神戸の地層	53年2月5日	神戸市　名　谷	〃	48
	昆陽池の鳥	〃　2月5日	伊丹市　昆陽池	〃	18
	甲山の地質	〃　2月12日	甲　　　山	〃	25
	箕面のサル	〃　3月5日	箕　面　公　園	〃	15

普及教育事業

実 習 講 座	動物園サマースクール (天王寺動物園と共催)	52年7月24日・27日・ 30日 (3組に分けて実施)	自 然 史 博 物 館	小4～小6年生	210
	森の調査法入門	52年8月7日	池田市 五月山	高校生以上	24
	草原の調査法入門	“ 8月13・14日	自 然 史 博 物 館	“	22
	小さな化石	“ 11月27日	自 然 史 博 物 館	中学生以上	32

Ⅱ 標 本 同 定 会

年 月 日	参加者数	同定件数	部 門 別 件 数	参 加 者 地 域 区 分	
52年8月28日 (日) 10～0時 13～16時	341	190	植 物 86件 昆 虫 37 鉱物・岩石 23 化 石 17 貝 16 その他動物 10	大阪市内 117件 (東住吉47など23区) 大阪府下 52件 (堺11・枚方7・茨木5・吹田5 など20市町村) 他 府 県 9件 (神戸2・宝塚1・八幡町2・天 理1・奈良1・上牧町1) 不 明 3件	

Ⅲ 科学映画会

月2回定例(毎月第1・3日曜日 2回上映)の科学映画会と、野尻湖友の会等との共催の映画会を、計28回開催した。友の会の日(会員無料入館日)としているが、利用は毎回10人足らずである。映画を目的にして来る入館者は少ないが、上映時間中は、展示室はからっぽになっている。なおフィルムは、大部分を、大阪科学技術センター視聴覚ライブラリーより借用した。年間の参加者数は、のべ10,400人であった。

月 日	映 画 名
52年4月3日	クストー深海の探険
“ 4月17日	カリマンタンの50日
“ 5月1日	クストー白い鮫と人間
“ 5月15日	木 の 家
“ 6月5日	石 油
“ 6月19日	ニューギニアの自然
“ 7月3日	哺乳動物発生の記録
“ 7月17日	細 胞
“ 8月7日	地球はいっぱい
“ 8月21日	微生物と工業
“ 9月4日	奇妙な世界
“ 9月18日	パンの世界
“ 10月2日	水 銀
“ 10月16日	尾 瀬
“ 10月21日	森は生きている よみがえる大地
“ 11月6日	本 州 の 山
“ 11月20日	南極観測10年の歩み
“ 12月4日	火山列島の謎
“ 12月18日	クストー神秘の湖

53年1月8日	日本列島の生いたち
“ 1月22日	富 士 山 小湊のオオハクチョウ
“ 2月5日	ファーブル昆虫記の世界
“ 2月19日	ハチの生活
“ 2月26日	野尻湖の発掘
“ 3月5日	信 州 の 森
“ 3月12日	野尻湖の発掘(スライド)
“ 3月19日	水鳥の生活
“ 3月26日	椿 山

Ⅳ 講 演 会 (館内講堂)

月 日	演 題	講 演 者	参加者
52年10月29日 (土) 午後1時30分	和泉山脈の地質と 生いたち	両角 芳郎 (当館学芸員)	人 200
“ 11月12日 (土) 午後1時30分	和泉山脈の生物	日浦 勇 宮武 頼夫 布谷 知夫 (当館学芸員)	150
53年1月22日 (日) 午後1時30分	近畿地方の哺乳類 (友の会と共催)	朝日 稔 (兵庫医大教授)	150
53年1月29日 (日) 午後2時	蝶研究者から見た カンアオイの生物 地理 フランス人のアジ ア植物研究 (植物分類地理 学会と共催)	日浦 勇 (当館学芸課長) 北村 四郎 (京大名誉教授)	150

Ⅴ 自然史講座

はじめてのころみとして、4回連続の自然史講座を行なった。

テーマ：蝶の生物地理と人工環境

日 時：第1回 52年6月11日(土)午後1時30分～4時
 第2回 “ 6月18日(土)午後1時30分～4時
 第3回 “ 6月25日(土)午後1時30分～4時
 第4回 “ 7月2日(土)午後1時30分～4時

定 員：60名

講 師：日浦勇（当館学芸課長）

Ⅵ 植物園案内

毎月1回、第1土曜日を主に、長居植物園入園者を対象に、植物園案内を実施した。年間12回、参加数は延445人であった。

Ⅶ 普及行事の記録

行事の内容や結果の一部は、友の会発行 Nature

Study に記録されているので、その巻号頁を付した。

52年5月29日 磯の動物達の観察 豊田裕美子
 Vol 23, 7 (11)

“ 7月24日 セミの観察会 横畑 泰志
 Vol 23, 8 (11)

“ 9月10日 マチの中で鳴いている虫 藤井 伸二
 Vol 23, 10 (11)

“ 12月4日 虫の冬ごし観察会 藤井俊夫・伸二
 Vol 24, 1 (11)

自然観察地図

52年4月24日 槇 尾 山 Vol 23, 4 (8-9)

“ 6月19日 多奈川東川 Vol 23, 6 (10-11)

“ 9月4日 紀見峠から根古谷 Vol 23, 11 (11)

Ⅷ 大阪市立自然史博物館友の会

■会 員

52年12月31日 991名

会員の階層

階 層	小学生	中学生	高校生	大学生	会社員	公務員	学校 大学 勤務	学校 団体	その他 団 体	医療 関係	自 営	そ 他	記入 なし
人 数	46	44	54	84	121	66	270	14	7	17	14	38	216

会員の年令

年 令	～9	10～14	15～19	20～29	30～39	40～49	50～59	60～69	70以上	記入なし	団 体
人 数	9	65	95	248	149	147	66	31	9	151	21

会員の性別

性 別	男	女	団 体
人 数	824	146	21

住 所

住 所	市 内	大阪府下	近畿地方	近畿以外
人 数	340	366	180	105

興味のある分野

分 野	地学	植物	動物	昆虫	その他	記入なし
人 数	310	349	221	275	18	217

以上は、入会時のアンケート結果である。昨年度と大きな変化はないが、20才代～40才代、学校大学勤務の会員数が増加していることは、友の会の性格を考える上で特徴的である。かつては、博物館や友の会の行事に参加できること（行事案内をもらえること）は、大きなメリットであったが、最近は観察会を主催する団体が多く、反面、参加しようとする人の数は相対的には増加せず、行事を目的とした会員数は減少していると思われる。今年度はじめて会員数が1,000名に至らなかったが、積極的な会の宣伝等をまったく行わなかったこととともに、そのことも原因になっていると考えられる。なお、友の会の年度は1月から12月であるため、1月からの新年度には会員を増やすための宣伝等を行なっている。

■ 評議員会

会 長	粉川 昭平（市立大学理学部）
副会長	岡田 康稔（大阪府自然保護課嘱託）
	千地 万造（自然史博物館館長）
評議員	宇坪 直子（大阪外大大学院）
	景守 紀子（交野高校）
	桂 孝次郎（自 営）
	金子寿衛男（市岡高校）
	後藤 光男（会社員）
	佐藤 治雄（府立大学農学部）
	谷 幸三（御所東高校）
	中島 康裕（京大理学部学生）
	西川 喜朗（追手門学院大学）
	堀田 満（京大教養部）
	前田 保夫（神戸市教育センター）
	道盛 正樹（公務員）

■ 事務局職員

木村 孝
藤田 安見

二名が交代で事務局を担当してきたが、53年2月より、木村孝が退職し、かわって、安井朗子が藤田と共に事務局を担当している。

■ 行 事

52年5月29日	「海岸動物の観察会」	
	和歌山市城ヶ崎	45名
52年8月23・24日	金剛山	49名
52年9月10日	「鳴く虫の観察会」	
	自然史博物館	20名
52年10月30日	「クモとトンボを見る会」	
	大阪府島本町	28名
52年11月12日	交 流 会	
	自然史博物館	30名
53年1月22日	友の会総会・交流会	
	自然史博物館講堂	50名

■ Nature Study（月刊・同会発行普及誌）の発行事業

昭和52年4月～昭和53年3月31日

Vol. 23—4月号～Vol. 24—3月号（各12ページ，12冊）

■ 友の会の日

映画会や植物園案内など、館内で普及行事が行われる場合には、友の会会員は、会員証を受付で提示して、職員通用門から入館できる。

映 画 会	28日	
植物園案内	12日	
講 演 会	3日	合計 43日

■ 書籍類販売事業

普及センターにおいて、当館出版物（展示解説書，収蔵資料目録，特別展解説書等）とともに，自然科学に関する書籍類を販売（カッコ内は発行者）

- ・恐竜の世界（1975 友の会）
- ・グラフ大阪（1974 友の会）
- ・自然史博物館の収集活動（1973 日本博物館協会）
- ・神戸の化石と化石産地（1975 兵庫県自然保護協会）
- ・大台ヶ原山の自然観察（1977 日本自然保護協会）
- ・大阪の自然とわたしたち（1977 日本自然保護協会関西支部）
- ・対島の生物（1976 長崎県生物学会）
- ・絵はがき（骨格標本，昆虫，チョウなど21種 友の会）

庶務

I 沿革

昭和24年11月8日—自然科学博物館開設準備委員会設置

昭和25年4月1日—自然科学博物館費予算に計上

昭和25年11月10日—市立美術館2階廊下において展示開設

昭和27年4月17日—博物館相当施設に指定

昭和27年6月2日—大阪市立自然科学博物館条例および規則制定

昭和27年7月10日—博物館法第10条により登録（第2号）

昭和27年10月1日—筒井嘉隆、館長に就任（39.7.4退任）

昭和32年6月7日—市立美術館より西区靉2丁目（戦災元靉小学校校舎改造）に移転

昭和33年1月13日—開館

昭和34年—新館建設について本市社会教育審議会の意見具申（教育委員および市長へ）

昭和39年3月31日—市条例および規則改正

昭和39年7月4日—千地万造 館長に就任（現在に至る）

昭和39年—「日本育英会貸与金の返還を免除する職をおく研究所」に指定される。

昭和42年—大阪府総合計画局「30年後の大阪の将来計画、により長居公園内に新館敷地確定

昭和44年8月—新館建設のための基本構想審議委員会組織

昭和45年4月—自然史博物館建設委員会組織

昭和47年1月21日—自然史博物館建設工事着工

昭和48年3月31日—自然史博物館建設工事竣工

昭和48年4月1日—旧館閉館

昭和48年7月—新館へ移転開始並びにディスプレイ契約締結（竣工49年3月）

昭和49年4月1日—大阪市立自然史博物館条例公布（施行49.4.2）

昭和49年4月26日—自然史博物館開館式挙行

昭和49年4月27日—開館

昭和49年5月31日—レーニングラード市副市長・市議会議員来訪

昭和49年7月27日—上海市友好代表団来訪

昭和51年8月19日—文部省科学研究費補助金取扱規定

第2条第4号に規定する学術研究機関として指定される。

昭和52年7月—社会教育施設活動促進費（国庫補助）の交付内示（普及教育事業を主とした補助額 750,000円）

昭和52年10月5日—昭和52年度科学研究費補助金（一般研究D）の交付決定（那須孝悌，「シダ類胞子の花粉分析学分野への寄与に関する基礎的研究」補助額 400,000円）

II 組織（昭和53年3月31日現在）

■ 職員の配置

館長(1)-副館長(1)-庶務課長(1)-主査(1)-事務職員(7)
 (庶務課長兼務)-学芸課長(1)-主任学芸員(1)-技術職員(8)
 -学芸員補(1)-学芸員(8)
 -学芸員補(1)

■ 職員名簿

職 名	氏 名	職 名	氏 名
館 長	千地 万造	学芸課長	日浦 勇
副館長兼庶務課長	坂間 忠雄	主任学芸員	柴田 保彦
〃 主査	出水 又義	学芸員補(動物)	山西 良平
事務職員	加納 康嗣	学芸員(昆虫)	宮武 頼夫
〃	鈴木三千代	〃 (植物)	瀬戸 剛
〃	中駄 一男	〃 (〃)	岡本 素治
〃	熊本 喜成	〃 (〃)	布谷 知夫
技術職員	西村 元	〃 (地史)	両角 芳郎
守 衛	小川 泰利	〃 (〃)	石井 久夫
〃	菊池 勝	〃 (第四紀)	那須 孝悌
業 務 員	内本 光次	〃 (〃)	樽野 博幸
〃	大谷 春雄		
汽かん員	加藤 正次		
電気作業員	平岡徳次郎		
一般作業員	池田 昭利		
〃	馬野 正雄		
〃	吉田 茂		
〃	下原千鶴子		

■ 人 事

- 昭和52年5月7日 白井 俊 総務部整備課設備係へ転出、熊本喜成 社会教育部社会教育二課南方青少年会館より当館庶務課へ
- 昭和52年5月26日～6月10日 千地万造 インドネシアに出張
- 昭和52年10月1日 山西良平 採用（学芸課動物研究室）

■ 学芸員資格

氏 名	資 格 試 験 合 格 年 月 日	学 芸 員 資 格 取 得 年 月 日	氏 名	資 格 試 験 合 格 年 月 日	学 芸 員 資 格 取 得 年 月 日
千 地 万 造	昭和33年 1 月23日	昭和33年 2 月17日	布 谷 知 夫	昭和50年 2 月24日	昭和50年11月 1 日
日 浦 勇	〃	昭和34年 1 月 5 日	両 角 芳 郎	昭和46年 3 月25日	昭和46年 3 月25日
柴 田 保 彦	〃	昭和34年 1 月 5 日	石 井 久 夫	昭和50年 2 月24日	昭和50年 4 月 1 日
宮 武 頼 夫	昭和43年 2 月28日	昭和43年 3 月 7 日	那 須 孝 悌	昭和49年 3 月 8 日	昭和49年 3 月 8 日
瀬 戸 剛	昭和39年 3 月 9 日	昭和39年 4 月 1 日	樽 野 博 幸	昭和49年 3 月 8 日	昭和49年11月 1 日
岡 本 素 治	昭和50年 2 月24日	昭和50年 2 月24日	山 西 良 平	未 取 得	

Ⅲ 予 算・決 算

■ 昭和50年～52年度（人件費をのぞく）

（単位千円）

歳入 歳出 区分	部区分	事 項	50 年 度		51 年 度		52 年 度	
			当初予算	決 算	当初予算	決 算	当初予算	決 算
歳 入		入 館 料 ほ か	23,015	10,110	23,106	11,307	12,008	11,913
		雑収(パンフレット等売上代)	1,437	1,181	3,672	1,532	3,551	1,454
		国 庫 補 助	0	0	0	0	0	750
		合 計	24,488	11,291	26,778	12,839	15,559	14,117
歳 出	第 1 部	展 覧 事 業 費	2,448	5,043	2,288	2,230	2,794	2,706
		月の石展覧事業費	810	674	365	556	0	0
		特 別 展 覧 事 業 費	2,019	2,255	1,817	1,459	1,817	1,970
		調 査 研 究 事 業 費	1,686	2,403	2,111	2,547	2,552	2,767
		資料収集保管事業費	1,766	1,602	1,939	1,763	2,294	1,817
		普 及 教 育 事 業 費	265	264	297	383	297	881
		整 備 充 実 費	492	639	374	221	—	—
		一 般 維 持 管 理 費	39,172	34,869	40,064	40,096	43,048	42,861
		合 計	48,658	47,749	49,255	49,255	52,802	53,002
	第 2 部	館 蔵 品 整 備 事 業	7,000	7,000	3,100	2,600	1,000	1,175
		市民図書整備事業	2,000	2,000	1,800	1,800	1,000	1,000
		飼育栽培場整備事業	0	0	3,500	4,200	4,300	4,423
		バス駐車場整備	0	0	0	0	3,200	2,902
		合 計	9,000	9,000	8,400	8,600	9,500	9,500
	第 1 部・第 2 部 合 計		57,658	56,749	57,655	57,855	62,302	62,502

■ 当初予算年度別推移

（歳 入）

（単位千円）

区分 \ 年度	49	50	51	52
入館料ほか	21,344	23,015	23,106	12,008
雑 収	870	1,437	3,672	3,551
合 計	22,214	24,488	26,778	15,559

(歳出)		(単位千円)										
年度 部区分	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52
第1部	3,345	3,827	4,160	4,347	5,656	5,567	6,337	20,653	58,425	48,658	49,255	52,802
第2部	1,000	1,310	1,500	1,730	2,000	103,000	815,310	151,000	10,104	9,000	8,400	9,500
合計	4,345	5,137	5,660	6,077	7,656	108,567	821,647	171,653	68,529	57,658	57,655	62,302

■ 歳入月別内訳

(単位 円)

年度 事項 月別 区分	50 年 度			51 年 度			52 年 度		
	入館料等	雑 収	計	入館料等	雑 収	計	入館料等	雑 収	計
4 月	円 950,595	円 4,000	円 954,595	円 1,180,715	円 163,350	円 1,344,065	円 1,402,975	円 73,100	円 1,476,075
5 月	1,268,950	10,000	1,278,950	1,510,035	137,600	1,647,635	1,629,215	78,000	1,707,215
6 月	710,925	1,500	712,425	705,280	82,650	787,930	623,240	167,202	790,442
7 月	529,605	250	529,855	627,580	55,400	682,980	619,205	60,700	679,905
8 月	1,071,800	11,500	1,083,300	2,504,370	410,150	2,914,520	1,168,780	143,800	1,312,580
9 月	644,460	183,902	828,362	621,935	90,100	712,035	637,115	49,250	686,365
10 月	1,229,515	217,750	1,447,265	1,093,425	125,600	1,219,025	2,249,720	305,000	2,554,720
11 月	1,588,290	317,800	1,906,090	567,780	99,850	667,630	1,445,510	357,250	1,802,760
12 月	191,030	89,150	280,180	267,885	89,450	357,335	270,115	60,300	330,415
1 月	271,125	172,500	443,625	350,160	85,950	436,110	336,350	39,300	375,650
2 月	566,570	59,250	625,820	664,280	96,502	760,782	356,490	62,500	418,990
3 月	1,086,805	113,400	1,200,205	1,213,780	95,450	1,309,230	1,174,560	56,900	1,231,460
計	10,109,670	1,181,002	11,290,672	11,307,225	1,532,052	12,839,277	11,913,275	1,453,302	13,366,577

Ⅳ 入 館 者 (昭和52年度) (再掲)

事項 月別 区分	有 料		無 料	計	開 館 日 数 (日曜日数)
	大 人	小 人	幼・小・ 中 学 生		
4	10,071人	8,629人	454人	19,154人	25 (4)
5	11,119	13,114	6,239	30,472	24 (5)
6	4,111	5,028	3,422	12,561	26 (4)
7	3,973	4,786	392	9,151	27 (5)
8	7,465	8,712	59	16,236	26 (4)
9	4,170	4,472	2,346	10,988	24 (4)
10	6,370	13,074	5,489	24,933	26 (5)
11	3,388	10,180	4,508	18,076	24 (4)
12	1,509	2,898	415	4,822	22 (4)
1	2,064	2,868	923	5,855	23 (4)
2	2,339	2,950	784	6,073	23 (4)
3	7,045	10,277	4,336	21,658	26 (4)
計	63,624	86,988	29,367	179,979	296 (51)

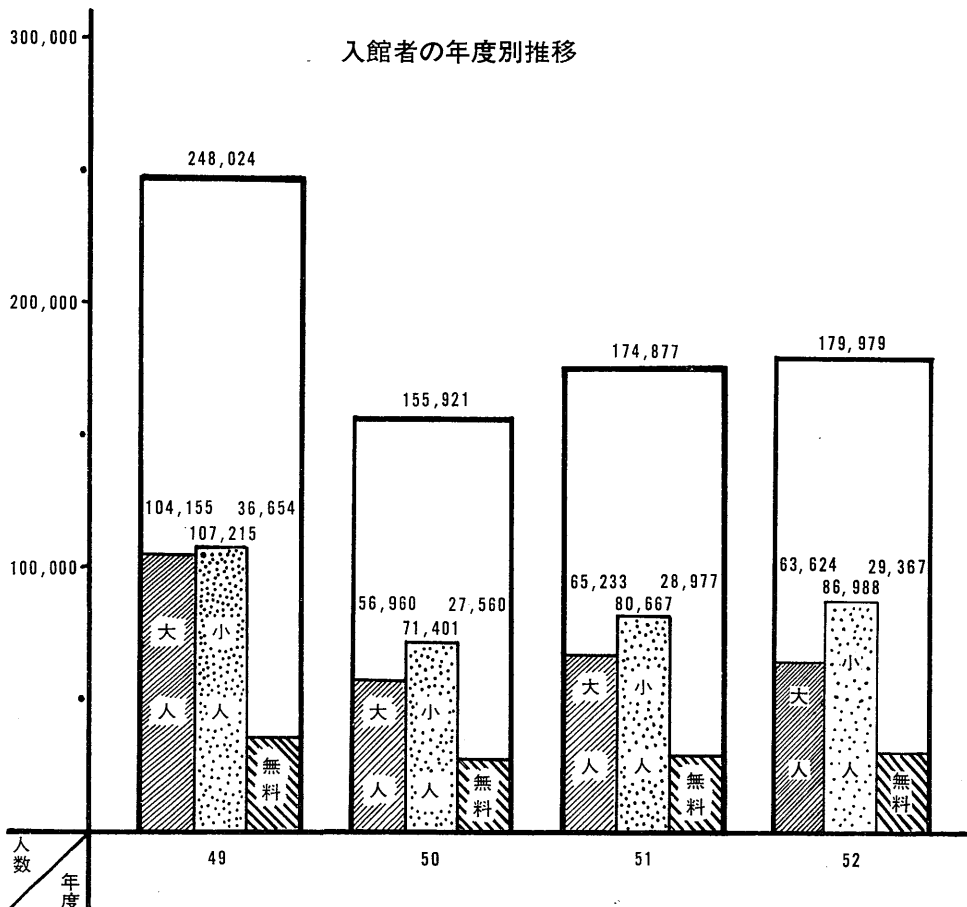
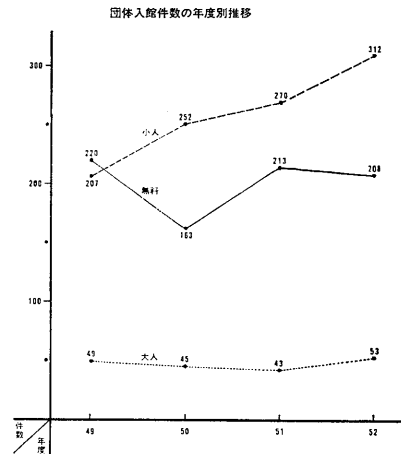
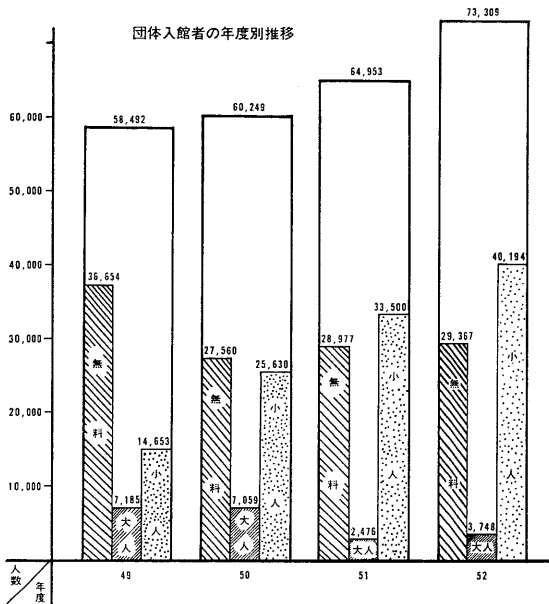
■ 団体入館者の内訳（昭和52年度）

● 有料団体

区分 月別	大人を主とした団体				小人を主とした団体							合 計	
	団 体 数			人 数	団 体 数						人 数	団体数	人 数
	社会教育 諸 団 体	高校大 学ほか	計		青少年 団 体	小学校	中学校	高等 学校	養護 教育 諸 校	計			
4		4	4	399	8	8	1			17	1,764	21	2,163
5	3	8	11	712	26	29	5		2	62	8,642	73	9,354
6		2	2	304	11	6	2			19	2,100	21	2,404
7	3		3	417	9	4				13	926	16	1,343
8	1	2	3	248	9	1	1			11	623	14	871
9	3		3	161	7	1	1			9	1,127	12	1,288
10	3	8	11	777	10	42	12		1	65	9,938	76	10,715
11	1	5	6	251	10	28	11			49	8,058	55	8,309
12		2	2	90	2	6	3			11	1,579	13	1,669
1					3	3				6	900	6	900
2	1	2	3	154	2	10	1			13	1,568	16	1,722
3	4	1	5	235	14	22	1			37	2,969	42	3,204
計	19	34	53	3,748	111	260	38		3	312	40,194	365	43,942

● 無料団体

区分 月別	保 育 所		幼 稚 園		小 学 校		中 学 校		養護教育 諸 学 校		そ の 他 (老人クラ ブ ほか)		計	
	件数	人 数	件数	人 数	件数	人 数	件数	人 数	件数	人 数	件数	人 数	件数	人 数
4	1	23			2	236	1	195					4	454
5	6	466	7	1,350	24	4,353	1	29	1	41			39	6,239
6	9	861	4	487	2	1,679	1	333	2	62			18	3,422
7	1	71	1	303			1	7	1	11			4	392
8	1	59											1	59
9	5	321	5	661	5	1,079	1	136	2	46	1	103	19	2,346
10	5	324	13	1,299	18	3,257	4	609					40	5,489
11	8	597	1	184	16	3,704			1	23			26	4,508
12	1	19			2	344			1	52			4	415
1	2	187	1	44	2	370			2	322			7	923
2	3	125	1	78	5	581							9	784
3	17	1,224	9	1,304	7	1,192	3	591	1	25			37	4,336
計	59	4,277	42	5,710	83	16,795	12	1,900	11	582	1	103	208	29,367



V 学芸員講師派遣状況

月 日	氏 名	講 師 派 遣 内 容	場 所	依 頼 者
4/17	日 浦 勇	4月の自然観察会「春の虫を見よう」	高 槻 市	高槻公害問題研究会
5/19	岡 本 素 治	野草採集および同定（小学校教員）	岸和田市立 科学技術 教育センター	岸和田市 教育委員会
5/20～22	布 谷 知 夫	第5回「自然教育セミナー」植物班指導	豊 中 市 立 青少年自然の家	(財)大阪青少年 活動振興協会
6/14	瀬 戸 剛	中学校理科研修講座（中学校教員）	神 戸 市 立 教育研究所	神 戸 市 立 教育研究所
6/30	岡 本 素 治	海浜植物の生態観察ならびに採集 （小学校教員）	男里川河口付近	高石、忠岡小学 校教育研究会
6/30	瀬 戸 剛	森林植物、熱帯植物および栽培植物の生態 ・形態の観察 （小中学校理科第二種研修受講者）	交野市 私 市 大阪市立大学 附属植物園	大 阪 府 科 学 教育センター
7/ 5	瀬 戸 剛	校庭における植物採集 （生野区教職員理科実技研修）	大 阪 市 立 北 鶴 橋 小学校	
7/10	日 浦 勇	夏の虫についての指導	高 槻 市 神峯山寺付近	高 槻 公 害 問 題 研 究 会
7/21	日 浦 勇	ファール昆虫記学校	大 阪 中 之 島 関 電 ホール	朝 日 新 聞 大 阪 本 社
8/13	那 須 孝 悌	文化財講座（市民講座）「先史時代の自然」 講演	当 館	(財)大阪文化財 センター
8/15～21	石 井 久 夫	泉福寺洞穴遺跡調査員	佐 世 保 市 瀬 戸 越 町	佐 世 保 市 教育委員会
8/18	瀬 戸 剛 宮 武 頼 夫	親子で自然に親しむつどい	奈良県吉野方面	(財)生野区コ ミュニティ協会
9/16	瀬 戸 剛	植物の形態・形成および自然史博物館見学 （小中学校理科第二種研修）	大阪市立長居植 物園および当館	大 阪 府 科 学 教育センター
9/25	石 井 久 夫	自然教室（日曜講座）「金剛山の地質」	金剛山自然教室	(財)大阪府金剛 山自然保護協会
10/4	瀬 戸 剛	植物の形態・形成および自然史博物館見学 （小中学校理科第二種研修）	大阪市立長居植 物園および当館	大 阪 府 科 学 教育センター
11/8	石 井 久 夫	マントル対流説およびマグマの成因につい て講義（中学校理科教員）	岸和田市立 科学技術 教育センター	岸和田市 教育委員会

11/22	瀬戸 剛	植物の形態・分類 (小中学校理科第二種研修)	大阪市立 大長居植物園 および当館	大阪府科学 教育センター
12/7	両角 芳郎	二上山の地質(中学校理科教員)	枚方市立科学 教育センター	枚方市立 科学センター
2/25~26	日浦 勇	新生代の陸の古生物地理 (瑞浪シンポジウム)	瑞浪市 化石博物館	瑞浪市 化石博物館

Ⅵ 各種委員(調査員)受嘱状況

氏 名	期 間	内 容	依 頼 者
千 地 万 造	昭和50年7月21日 ～昭和54年7月20日	大阪府自然環境保全審議会委員	大 阪 府
	昭和39年7月4日 ～現在まで	イコム日本委員会委員	日本博物館協会
	昭和53年5月20日 ～昭和55年5月19日	日本博物館協会評議員	(社)日本博物館 協会
	昭和53年4月1日 ～昭和55年3月31日	日本博物館協会理事	
	昭和47年3月11日 ～昭和53年3月10日	文部省社会教育審議会委員	文 部 省
	昭和48年4月18日 ～昭和54年5月19日	(財)日本自然保護協会理事	(財)日本自然 保護協会
	昭和49年10月1日 ～昭和55年3月31日	岸和田市史編さん委員	岸 和 田 市
日 浦 勇	昭和52年6月～11月	自然史博物館建設調査委員	北 九 州 市
	昭和52年4月1日 ～昭和54年3月31日	日本第四紀学会評議員	日本第四紀学会
瀬 戸 剛	昭和52年4月～ 昭和54年3月31日	小川コレクション保管委員会委員	和 歌 山 県 立 紀伊風土記の丘 管 理 事 務 所
那 須 孝 悌	昭和52年4月1日 ～昭和54年3月31日	日本第四紀学会評議員	日本第四紀学会
山 西 良 平	昭和52年11月20日 ～昭和53年3月31日	関西空港建設計画検討漁業影響調査委員会 磯浜生物調査班調査員	関西空港建設計画検討漁業影響 調査班
	昭和52年12月1日 ～昭和53年3月31日	田辺湾底生生物調査調査員	京 都 大 学 理 学 部 付 属 瀬戸臨海実験所

Ⅶ 施設の利用状況（自然史に関する利用）

（集 会 室）

月日	団 体 名	人数
4/ 3	近畿植物同好会講演会	40
4/10	石友会総会	30
5/28	日本昆虫学会近畿支部大会	50
6/ 5	阪神わかやま野尻湖友の会総会，学 習会	80
6/26	近畿地学会研究発表	15
8/13	文化財講座「先史時代の自然」	90
9/ 8	中学校理科現代化講座	50
9/25	日本シダの会関西談話会例会	40
9/27	大阪市立中学校教育研究会社会部会	70
9/28	大阪市地域婦人団体協議会文化委員 会	70
10/ 2	台湾の自然調査団勉強会	30
10/21	大阪府森林組合青年部協議会総会・ 講演	50
11/ 5	大阪微化石研究会第26回例会	20
11/13	日本爬虫両生類学会	60
12/ 4	日本甲虫学会大会	40
12/11	関西トンボ談話会	30
1/28	日本昆虫学会近畿支部例会	60
1/29	自然の会臨時総会	70
2/ 5	関西トンボ談話会	50
2/ 7	昭和52年度産業教育担当教員研修会	70
2/19	近畿植物同好会総会	50
2/26	阪神わかやま野尻湖友の会発掘学習 会控室	60

（会 議 室）

月日	団 体 名	人数
4/16	大阪の森調査グループ学習会	10
4/24	大阪昆虫同好会昭和52年度総会	30
6/11	大阪の森調査グループ学習会	10
6/12	石友会化石研究会	15
7/10	日本スミレ研究会例会	10
9/ 3	日本爬虫両生類学会会務打合せ	8

9/11	石友会地学研究	15
9/14	台湾の自然調査団勉強会	30
10/16	大阪昆虫同好会例会	25
10/23	日本スミレ研究会近畿支部定例会	15
11/12	日本爬虫両生類学会会務打合せ	8
11/13	日本爬虫両生類学会	60
11/19 } 12/10 }	大阪の森調査グループ学習会	10
1/5・6	能勢野外活動センター，自然観察教 材作成	10
1/18	大阪の森調査グループ学習会	10
2/ 5	しだとこけ談話会例会	30
2/18	大阪の森調査グループ学習会	10
3/12	大阪昆虫同好会総会	20
3/19	大阪の森調査グループ学習会	10

（実 習 室）

月日	団 体 名	人数
4/ 3	関西トンボ談話会 例会	50
6/26	日本ボーイスカウト茨木第1団年少 隊館内見学後の発表会	80
8/20	阪神わかやま野尻湖友の会昆虫グル ープ学習会	10
1/12	大阪市小学校教育研究会第6プロッ ク理科研究会実験講習会	10
1/ 8	阪神わかやま野尻湖友の会昆虫グル ープ昆虫遺体検出実習	11
2/26	阪神わかやま野尻湖友の会発掘学習 会控室	30

（講 堂）

月日	団 体 名	人数
7/24	大阪自然教室，夏の美方自然教室開 催説明会	100
1/29	植物分類地理学会 総会	60
2/26	阪神わかやま野尻湖友の会発掘学習 会，映画会	200
3/12	〃	200
3/26	（社）関西自然保護機構設立発起人会	50

Ⅷ 館運営状況視察ほか（52年度）

年 月 日	視 察 ・ 見 学 者	目 的
52. 4.14(木)	大阪府下学校職員約40人 大阪府下公明党議員団40人	施 設 見 学 "
" 4.19(火)	近畿地方公設試験研究機関事務長20人	"
" 5.13(金)	トリネダ・イタリア大使来館 大都市管財事務主管者会議50人	当館所蔵・展示 の蝶コレクション 見学 施 設 見 学
" 5.19(木)	札幌市会岡田副議長・総務委員会一行 6 人	行 政 視 察
" 5.22(日)	札幌市青少年科学館建設委員会一行 6 人	事 情 調 査
" 5.27(金)	新潟県関副知事ら 4 人	自然科学館建設 につき事情聴取
" 6. 1(水)	都島区高令者学級50人	施 設 見 学
" 6. 2(木)	西成区クラブ会一行150人	"
" 6.10(金)	新潟県会議員一行20人	実 情 調 査
" 6.21(火)	サンフランシスコ留学生 4 人	施 設 見 学
" 6.30(木)	国立社会教育研修所湯上所長ら 5 人	運 営 状 況 視 察
" 7.29(金)	立教大学文学部学生28人	博 物 館 学 実 習
" 8. 4(木)	栃木県教育委員会文化課職員 2 人	県立博物館建設 につき実情聴取
" 8. 5(金)	石川県小松市市会議長	施 設 見 学
" 8.11(木)	新潟県企画課職員 3 人	自然科学館建設 のため実情聴取
" 8.25(木)	仏教大学通信課程学生55人	博物館学実習の ため
" 9.29(木)	文部省事務官 2 人	運 営 状 況 視 察
" 10. 7(金)	東淀川区第 2 期いちょう学園同窓会35人	施 設 見 学
" 10. 8(土)	北九州市浅野教育長	施 設 見 学
" 10. 9(水)	泉州銀行友の会20人	"
" 10.20(木)	（財）大阪都市協会会員 3 人	"
" 10.21(金)	西区優良特徴義務者・納税貯蓄組合一行50人	納税奨励の一環 として施設見学
" 10.22(土)	秋田県立博物館加賀屋館長	新展示計画策定 のため実情聴取
" 10.25(火)	大正区優良特徴義務者 納税貯蓄組合一行50人	施 設 見 学
" 10.26(水)	城東区いちょう学園40人	"
" 10.27(木)	名古屋市 P T A 指導者国内研修生18人 大阪市婦人団体協議会一行40人	" "
" 11. 2(水)	福井県坂井郡三国町郷土資料館建設委員10人	郷土資料館建設 のため事情聴取
" 11. 9(水)	旭区優良特徴義務者・納税貯蓄組合一行40人	納税奨励の一環 として施設見学
" 11.11(金)	東住吉区・平野区優良特徴義務者・納税貯蓄組合一行50人	納税奨励の一環 として施設見学

52.11.17(木)	栃木県立博物館設置専門委員および文化課職員 2 人	県立総合博物館建設につき実情聴取
〃 11.18(金)	京都市青少年科学センター長澤次長	施設見学
〃 11.26(土)	大阪女子大学生活理学部40人	〃
〃 12. 2(金)	北九州市人事第一課長ほか 2 人	研究職職務内容、処遇等調査のため事情聴取
〃 12.13(火)	朝鮮職業総同盟（ムン・ビョン・ロク代表）一行17人	施設見学
〃 12.24(土)	香川県科学館館長ら 4 人	〃
53. 1.18(水)	堺市初等教育研究会理科部会140人	〃
〃 1.26(木)	堺市建築部顕谷次長ほか	博物館建設につき説明聴取
〃 2. 7(火)	産業教育担当教員研修会約50人	施設見学
〃 2. 8(水)	山口県徳山市動物園職員 2 人	〃
〃 2.14(火)	東成区各小学校理科主任研修会	〃
〃 2.18(土)	国立科学博物館土生次長ほか 1 人	運営状況につき説明聴取
〃 2.24(金)	石川県白山保護センター佐藤庶務課長	運営状況調査
〃 2.27(月)	北海道水産部漁政課職員 2 人	北洋資料館建設につき実情聴取
〃 2.28(火)	国立科学博物館佐藤事務官	運営状況につき説明聴取
〃 3. 9(木)	国学院大学学生40人	博物館学実習
〃 3.18(土)	インドネシア地理院文献資料部長スワルデイ氏 カナダ・オンタリオ・サイエンス・センター館長ウイルソン氏	運営方法等につき意見交換のため（国際交流基金文化人短期招へい計画） 館長との面談並びに視察のため（国際交流基金文化人短期招へい計画）

Ⅸ 当館に関する紹介資料（外部資料）

- ・社団法人日本博物館協会編集（1978）大阪市立自然史博物館（市立・科学），全国博物館総覧下巻〔単行本564頁〕229
- ・無名（1977・1978）大阪市だよりNo.145～156（大阪府市市長室広報課発行）自然史博物館からの手紙(4)タンポポ，(5)カエル，(6)夜の虫，(7)夏のユリ，(8)お盆の植物，(9)鳴く虫，(10)和泉青石，(11)キク，(12)ミノムシ，(13)ウマ，(14)冬の鳥たち，(15)春の野原

建 物 管 理

I 施 設

■ 所在地 大阪市東住吉区東長居町(長居公園内)

■ 建築面積 4,392.67㎡

■ 延床面積 7,066.01㎡

■ 構造 鉄筋コンクリート造, 一部屋根鉄骨造
地下1階, 地上3階

■ 主要各室面積・天井の高さ

(展示用施設) 計 2,427.48㎡ (天井の高さ)

オリエンテーション・ホール 550.35㎡ 11.00m
第1展示室 360.55㎡ 3.30m
第2展示室 486.64㎡ 7.20m
第3展示室 403.10㎡ 4.70m
特別展示室 360.55㎡ 4.20m
2階ギャラリー 266.29㎡ 6.80m

(研究用施設) 計 1,802.82㎡

館長研究室・暗室 各18.27㎡ 2.70m
動物・昆虫・植物・地史研究室 各47.56㎡ 2.40m
第四紀・外来研究室 各36.54㎡ 2.40m
生物実験室 49.20㎡ 2.40m
化学分析室・くんじょう室 各18.27㎡ 2.40m
電子顕微鏡室 37.43㎡ 2.70m
動物標本製作室 37.71㎡ 2.40m
昆虫・植物標本製作室 各36.54㎡ 2.40m
化石処理室 47.56㎡ 2.40m
石工室 22.21㎡ 2.70m
展示品製作室 28.05㎡ 2.70m
第1収蔵庫 207.09㎡ 3.00m
第2収蔵庫 310.08㎡ 3.00m
第3収蔵庫 207.09㎡ 3.00m
第4収蔵庫 310.08㎡ 3.00m
書庫 100.30㎡ 7.40m
編集記録室 36.54㎡ 2.40m

(普及教育用施設) 計 604.27㎡

講堂(映写室・控室含む) 319.09㎡ 2.60m (平均)

普及センター 93.30㎡ 2.70m
集会室 95.12㎡ 2.70m
実習室 96.76㎡ 2.70m

(管理用施設) 計 870.95㎡

館長室 36.54㎡ 2.70m
事務室 83.34㎡ 2.70m
応接室 29.54㎡ 2.70m
宿直室 16.85㎡ 2.55m
守衛室 17.64㎡ 2.70m
会議室 47.56㎡ 2.70m

機械室 472.35㎡ 5.85m

電気室 89.92㎡ 5.85m

自家発電機室 49.16㎡ 5.85m

中央監視盤室 28.05㎡ 2.40m

(共通部分) 計 1,360.49㎡

1階廊下 118.27㎡ 2.70m

2階廊下 102.29㎡ 2.40m

ロッカールーム 60.59㎡ 2.85m

エレベータホール 123.16㎡

ファンルーム(南・北側) 各16.80㎡

荷捌室 161.69㎡ 2.70m

玄関ホール 132.10㎡ 3.25m

倉庫 106.56㎡

1階ホール便所 76.26㎡

2階ホール便所 37.56㎡

管理検便所 43.47㎡

ダクトスペース 102.70㎡

階段 179.30㎡

その他 82.94㎡

総計 7,066.01㎡

■ 階数別面積

地階……………855.07㎡ 3階……………550.95㎡
1階……………3,178.35㎡ 屋階……………76.93㎡
2階……………2,404.71㎡

■ 各室定員

講堂……………266人 集会室……………48人
会議室……………22人 実習室……………31人
展示室(1階) 415人 展示室(2階) 400人
地階……………3人

■ 工 期 昭和47年1月21日～昭和48年3月31日

■ 総事業費 10億 1,000万円

(建設工事費) 7億 9,500万円

・本体工事(㈱竹中工務店) 491,735千円
・付帯工事 302,818千円

(設計監督委託料) 2,700万円

(内部設備費) 1億5,000万円

・内部備品 76,000千円

・第1展示室ディスプレイ(㈱日展) 21,999千円

・第2展示室ディスプレイ(㈱乃村工芸社)
24,978千円

・第3展示室ディスプレイ(㈱丹青社)
21,090千円

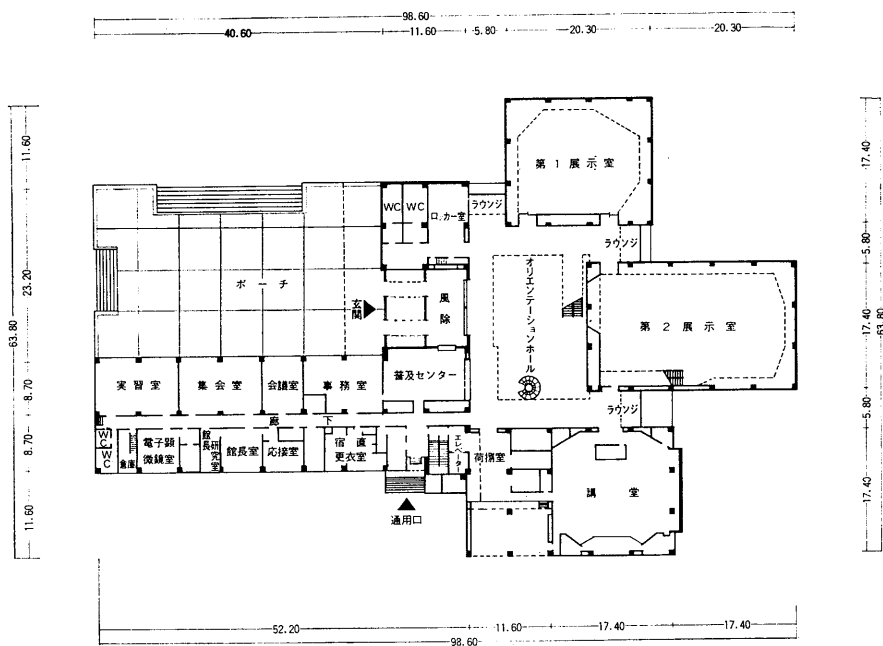
・オリエンテーションホールディスプレイ
(㈱電電広告) 6,090千円

(その他) 3,800万円
 事務費、移転費 (5,500千円) 公園樹木移設工
 事費 (4,200千円)

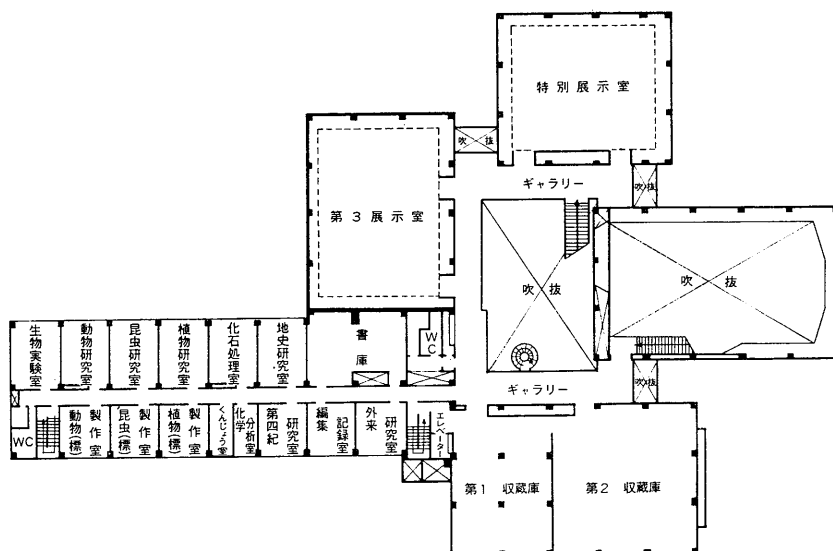
■ 国庫補助金・起債

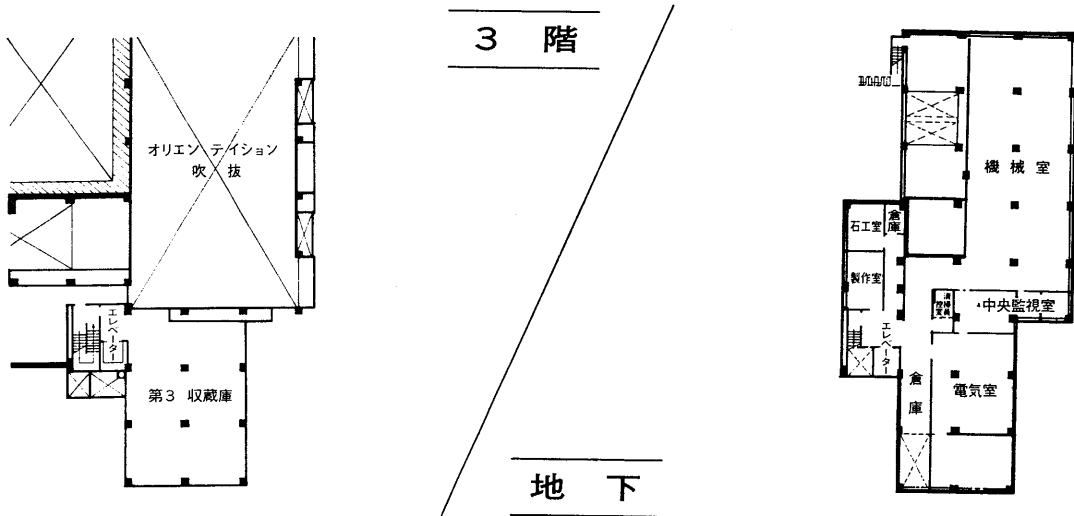
- ・ 国庫補助金 3,000万円 (47.10.13付交付決定)
- ・ 起 債 3 億8,762万円 (47.8.25付交付決定)

1 階



2 階





Ⅱ 空気調和装置

■ 展示室系統

・温度制御については、常時は第3展示室に設置の室内用検出器と制御パネルの信号により電動三方弁を比例制御し温度制御を行なっている。又第2展示室は暖房容量が不足するので、ブースターヒーターが取付けてある。

湿度検出信号により、再熱ヒーターが働くが、温度が異常に上がることも考えられるので、第1展示室に設置の室内用湿度調節器によりヒーターを強制的に切っている。

・湿度制御について還気ダクトに設置したダクト用湿度調節器により、ウェットマスターを作動させて加湿制御する。部分負荷時の湿度制御は第3展示室の室内検出器と制御パネルの信号により、ステップコントローラーを作動せしめ、再熱ヒーターを段階制御し、除湿を行う。設定値は、冷房 26℃、暖房 22℃、湿度 55%、上限温度 26℃

■ ホール研究室系統・講堂系統

・温度制御については、室内用温度検出器と制御パネルの信号により電動三方弁を比例制御し、又還気ダクト内に挿入型検出器により外気補償制御を行ない、外気温度に応じた室内温度を保つ。

・湿度制御は還気ダクト内の湿度調節器によりウェット

マスターを作動させて、加湿制御を行なう。設定値は冷房 26℃、外気補償温度 20%、暖房 22℃、外気補償温度 10%、湿度55%

■ 第1・3収蔵庫系統

・温度制御は、第3収蔵庫に設置の室内用温度検出器と制御パネルによる電動三方弁を比例制御で行なう。

・湿度制御は第3収蔵庫に設置の室内用湿度調節器により、ウェットマスターを作動し加湿制御を行なう。部分負荷時の湿度制御は、第3収蔵庫の室内用湿度検出器と制御パネルの信号により、ステップコントローラーを作動せしめ再熱ヒーターにより、異常に温度が上昇することも考えられそれを防止するため第1収蔵庫に室内用湿度調節器でヒーターを強制的に切る回路を設ける。設定値は冷房26℃、暖房22℃、湿度55%、上限温度26℃

■ 第2収蔵庫系統

・温度制御は冷水コイル出口温度検出器と制御パネルにより電動三方弁を比例制御し冷水コイル出口温度を常に一定に保ち室内用温度検出器と制御パネルによりステップコントローラーを動作し室内温度を制御する。

・湿度制御について、室内用湿度検出器と制御パネルによってパン型加湿器を動作し加湿制御を行なう。又部分負荷時の湿度制御は電動三方弁を強制的に全開し除湿を行なう。設定値は年間冷水出口温度11.6℃、室内温度20℃、湿度55%

建 物 管 理

月 別 各 室 温 ・ 湿 度 月 平 均 値

室 名	月 別		4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月	1 月	2 月	3 月
	温・湿度		°C	°C	°C	°C	°C	°C	°C	°C	°C	°C	°C	°C
外 気	月 曜	温 度	19.4	20.2	26.0	29.3	30.1	28.4	23.3	18.3	15.5	9.2	7.2	11.2
		湿 度	82.0%	49.0%	58.0%	67.6%	58.7%	56.7%	55.5%	57.2%	54.0%	44.3%	50.5%	35.7%
	火 曜	温 度	17.3	21.9	24.2	30.8	30.5	28.5	23.8	17.2	14.1	9.1	6.6	11.3
		湿 度	50.9	48.4	64.1	57.8	54.8	53.0	46.9	57.9	52.8	52.3	51.5	44.5
オリエン テー	月 曜	温 度	21.5	22.4	25.6	28.3	28.0	26.8	23.9	20.7	19.5	17.2	19.1	18.8
		湿 度	44.1	36.8	37.9	54.3	49.6	45.8	41.9	43.8	39.9	34.2	35.7	39.8
	火 曜	温 度	20.2	22.9	24.1	25.5	26.1	26.1	24.8	21.0	22.5	20.9	21.4	20.9
		湿 度	35.6	35.0	39.7	50.5	47.0	47.1	41.4	44.0	40.1	37.9	37.2	40.3
第 1 展 示 室	月 曜	温 度	26.7	26.1	28.3	30.5	29.0	27.0	25.9	22.6	20.4	18.0	17.7	19.0
		湿 度	46.6	39.1	44.1	52.8	49.6	46.5	35.7	36.1	32.1	30.0	38.4	40.2
	火 曜	温 度	25.0	26.4	26.2	26.4	26.5	27.1	26.0	22.7	22.7	21.1	20.1	21.2
		湿 度	40.3	40.0	42.5	46.8	43.9	44.3	34.2	38.7	32.0	34.8	43.5	43.1
第 2 展 示 室	月 曜	温 度	24.5	25.0	26.9	29.3	28.3	27.9	25.2	21.2	18.6	17.0	17.4	19.5
		湿 度	47.3	40.0	43.4	52.5	52.3	50.6	42.7	42.2	39.0	37.2	39.4	33.9
	火 曜	温 度	23.1	24.8	24.7	25.9	25.9	26.0	25.2	21.8	22.2	19.9	20.3	21.4
		湿 度	42.3	40.7	42.5	48.4	48.8	49.1	43.1	42.4	39.3	40.5	42.2	36.5
第 3 展 示 室	月 曜	温 度	25.0	25.0	28.6	31.1	29.8	29.5	25.6	21.2	20.0	17.1	17.0	19.6
		湿 度	39.7	35.7	35.4	49.1	50.6	46.8	38.9	40.0	36.1	34.0	36.8	32.5
	火 曜	温 度	23.5	24.6	24.7	25.8	25.9	26.9	26.5	23.0	23.4	22.8	23.0	23.4
		湿 度	37.0	35.4	35.3	48.8	49.3	48.1	38.9	39.7	36.1	38.7	39.5	35.6
特 別 展 示 室	月 曜	温 度	22.3	23.7	27.2	31.6	30.8	29.6	26.4	21.9	16.3	15.7	15.5	18.1
		湿 度	56.8	50.0	52.6	52.3	48.8	48.8	37.3	38.7	33.2	33.0	37.2	30.8
	火 曜	温 度	19.8	24.0	25.7	30.6	30.5	29.0	26.9	23.6	19.1	21.3	19.6	20.7
		湿 度	52.4	49.4	51.9	48.6	43.6	46.0	37.7	37.1	36.6	37.9	44.3	37.6
第 1 収 蔵 庫	月 曜	温 度	21.6	22.3	24.9	27.7	27.6	26.8	24.1	20.9	19.6	17.9	17.2	18.9
		湿 度	48.5	45.5	49.7	50.4	50.2	45.0	42.9	48.9	45.6	40.9	49.9	45.5
	火 曜	温 度	20.7	22.5	24.0	25.2	25.3	25.6	24.2	21.9	23.2	21.9	21.4	22.1
		湿 度	47.3	45.9	47.2	51.0	50.4	50.0	46.3	45.5	43.9	43.9	40.0	46.8
第 2 収 蔵 庫	月 曜	温 度	20.0	20.7	22.0	20.4	20.6	20.4	20.4	20.5	20.7	20.0	20.2	20.3
		湿 度	52.2	51.1	54.5	52.0	49.4	49.1	49.2	49.8	48.4	43.2	48.5	45.6
	火 曜	温 度	19.9	20.1	20.0	19.9	19.9	20.1	20.0	20.1	20.5	20.1	20.0	19.9
		湿 度	50.9	51.0	51.5	51.0	49.3	49.1	52.1	49.7	47.2	45.2	47.8	46.1

第 3 収 蔵 庫	月	温 度	21.7	22.6	25.7	28.7	28.2	27.3	24.1	20.6	19.2	17.5	17.6	19.1
	曜	湿 度	57.9	52.5	57.9	63.9	58.5	54.2	44.3	50.5	47.8	45.9	51.3	48.5
	火	温 度	20.8	22.9	24.5	25.7	25.8	25.9	24.1	21.5	22.8	21.3	20.7	21.4
	曜	湿 度	51.3	50.9	53.4	53.3	51.0	50.6	43.9	46.2	41.8	45.6	48.6	48.4

但し。室内用検出器での測定記録

- ・冷房期間5月14日～10月9日，暖房期間12月1日～3月31日
- ・特別展示室空調使用期間 5，6，10，11，2，3月
- ・第二収蔵庫は1年間空調運転

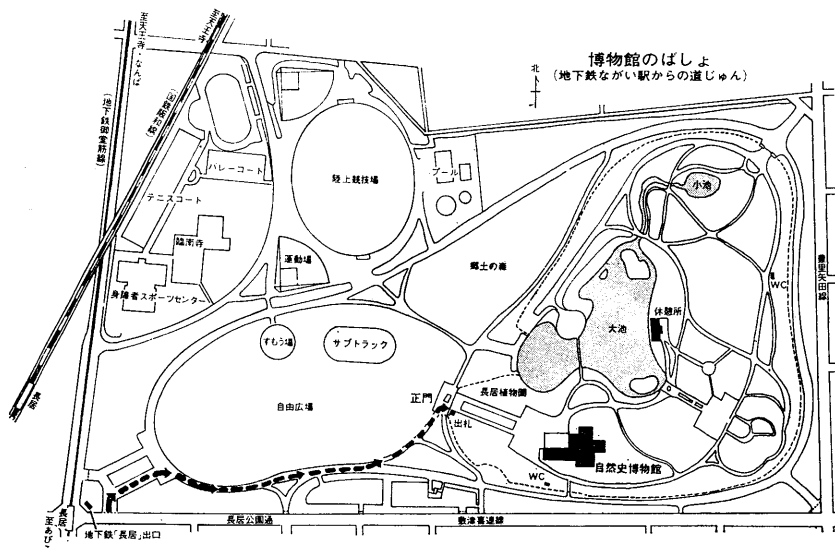
■ 清 掃

51年まで、オリエンテーション・ホール及び2階ギャラリーについては、磁気タイルのため水モップで、拭き取っていたが、水モップで拭くと、タイルが水で濡れている時は、外見は綺麗なものの、乾くと土埃が白くなって、浮上がる。従って、あまり掃除の効果がなく、その上終了時のオリエンテーション・ホール並びにギャラリーの清掃時間が多くかかる。そこで種々最善の方法を検討した結果、試験的に樹脂ワックスを使用することにし

た。すると今まで水で拭いていた時よりも、タイルが美しく見え、その上掃除もダスキンモップで乾拭により土埃が取り払うことが出来るようになって、掃除時間の短縮になった。

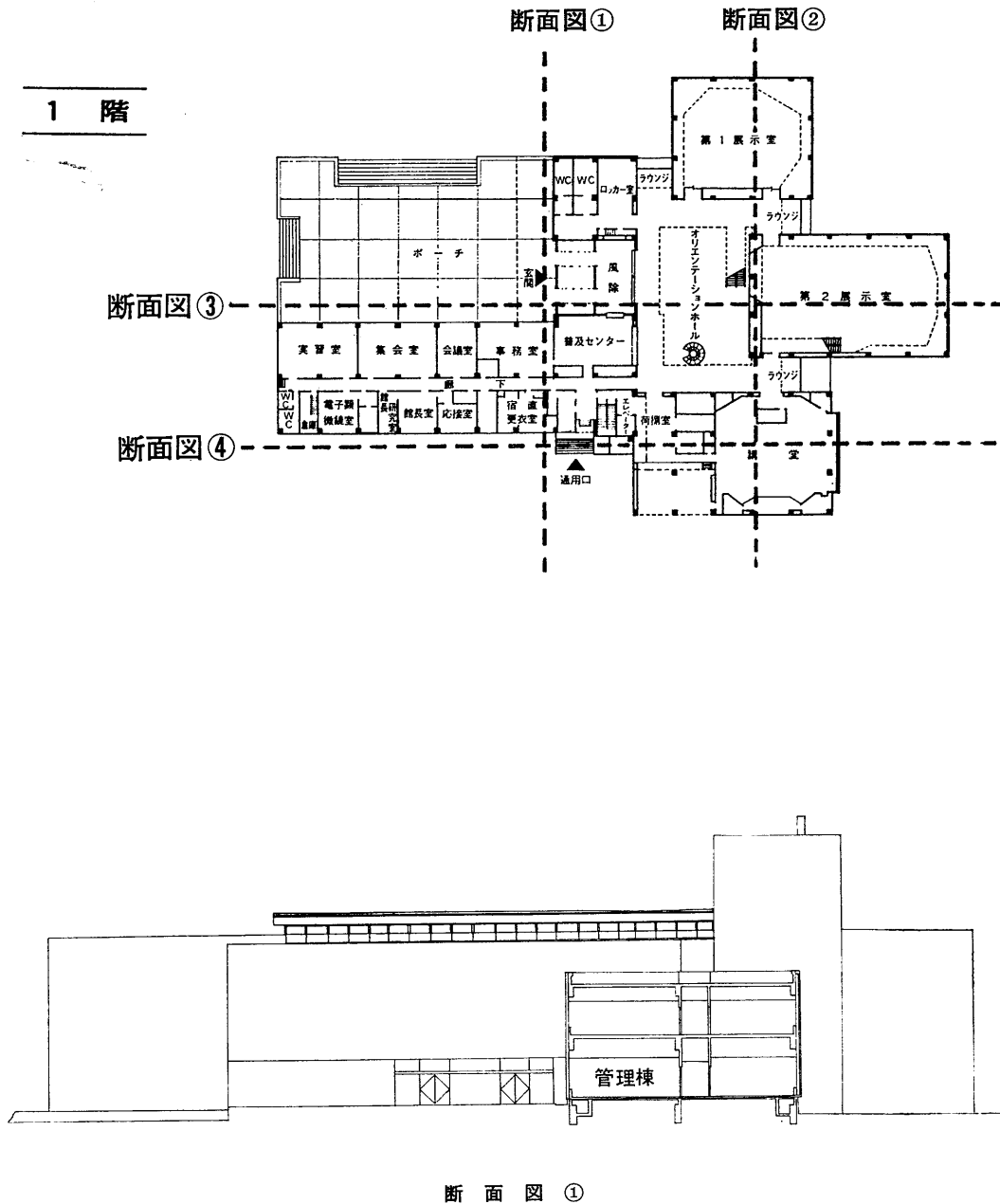
また、展示室については、従来、水性ワックスを使用していたが、1カ月でワックスの効果が薄れて汚れが、ビニールタイルにつき不潔感をいだかせるが、樹脂ワックスの使用によって、6カ月位汚れがつかなくなり、又光沢も持続するようである。

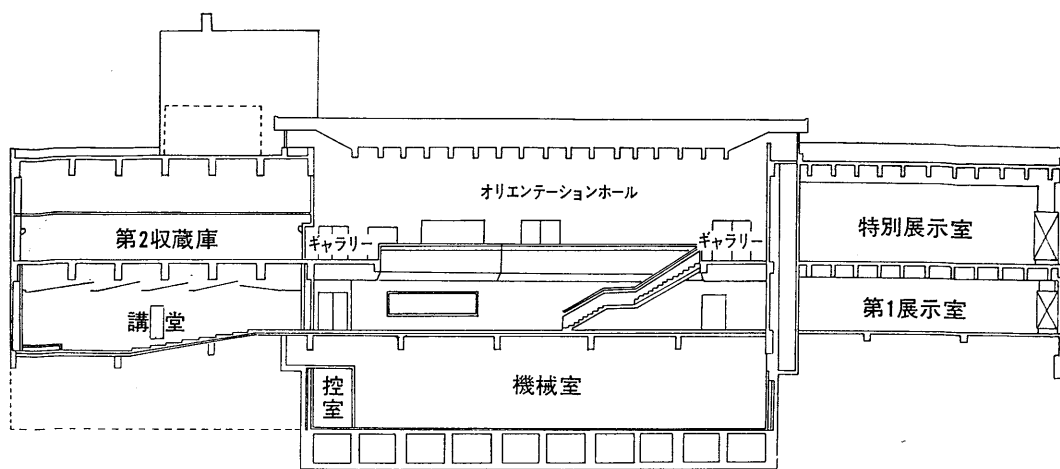
(自然史博物館付近見取図)



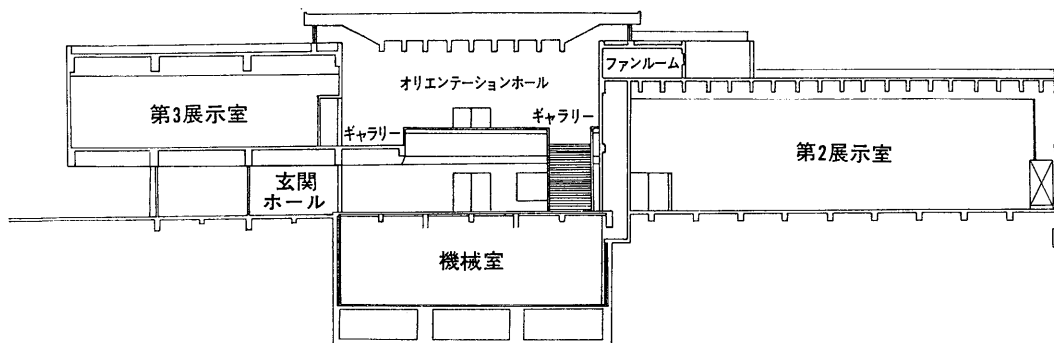
郷土の森では日本各地の樹木、長居植物園ではいろいろな植物が観察できます。

(建物断面図)

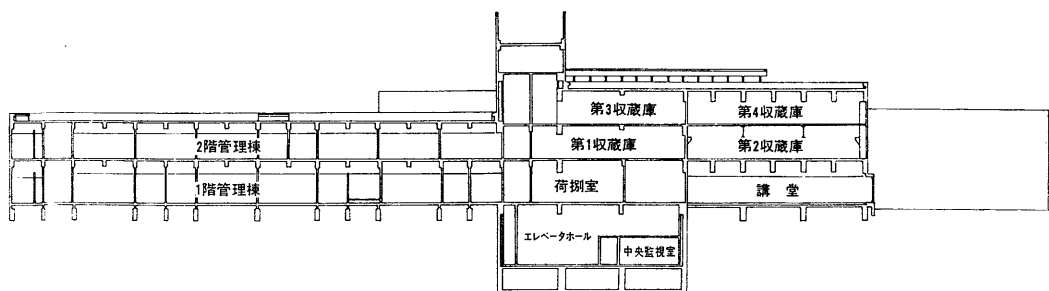




断 面 図 ②



断 面 図 ③



断 面 図 ④

利 用 案 内

■ 館の利用

開館時間	午前9時30分～午後4時30分（ただし、入館は午後4時まで）
休館日	月曜日、祝日（ただし、日曜日と重なる祝日は開館）年末年始（12月28日～1月4日）
入館料	大人100円、小人（16才未満）50円、6才未満無料（団体割引：30人以上1割、50人以上2割、100人以上3割）
講堂・集会室等の利用	本館の事業目的に添った集会、催しについて利用できる。
道 順	<ul style="list-style-type: none"> ● 地下鉄御堂筋線「長居」下車、東へ徒歩 800m（約10分） ● 国鉄阪和線「長居」下車 東へ 徒歩 1000m、（約15分） ● 市バス「長居東6丁目」下車 北へ 200m（約3分）
所在地	〒546 大阪市東住吉区東長居町（長居公園内）電話（06）697-6221（代）
団体入館申込の方法	<ul style="list-style-type: none"> ① 団体入館の場合は、あらかじめ電話等で連絡し、日時をとって下さい。 ② 引率者は、日時をとってから、引率指導のため、一度下見に来て下さい。（入館料無料） ③ 学校関係の引率者用に、パンフレット「引率の先生方に」を発行しています。（無料） ④ 入館料は、入館当日にいただきます ⑤ 大阪市及び八尾市内の小中学校、養護教育諸学校、幼稚園の先生が、校外学習の一環として園児・児童又は生徒を引率して入館される場合に無料になっています。事前に入館日時をとり「観覧料減免申請書」を提出して下さい。
自然(史)科学に関する質問の受付	自然（史）科学に関する質問にお答えします。電話または、本館普及センターまでおこし下さい。
野外行事など各種の普及行事	自然に親しみ、自然への理解を深めるための社会教育活動として各種の野外観察会、実習、講演会、映画会などの行事を開催しています。普及係までお問い合わせ下さい。

○大阪市立自然史博物館観覧料減免要綱

第1条 この要綱は、大阪市立自然史博物館条例第6条及び大阪市立自然史博物館規則第9条の規定による観

覧料の減免について定めることを目的とする。

第2条 博物館の入場者が30人以上の団体であるときは次の各号に定める割合の観覧料を減額する。

- (1) 入場者が30人以上の団体のとき1割
- (2) 入場者が50人以上の団体のとき2割
- (3) 入場者が100人以上の団体のとき3割

第3条 本市及び八尾市内の小中学校（大阪市立弘済小学校及び大阪市立長谷川小学校を含む）、中学校（大阪市立羽曳野中学校を含む）、盲学校、聾学校、養護学校、幼稚園及び保育所（以下「小中学校等」という。）の教員及び保母が、小中学校等の幼児、児童又は生徒を引率して博物館に入場しようとするときは、教員、保母、幼児、児童及び生徒の観覧料を免除する。

第4条 生活保護法（昭和25年法律第144号）児童福祉法（昭和22年法律第164号）身体障害者福祉法（昭和24年法律第283号）精神薄弱者福祉法（昭和35年法律第37号）又は老人福祉法（昭和38年法律第133号）に規定する社会福祉施設の職員が、当該施設の入所者（当該施設に収容された者を含む）を引率して博物館に入場しようとするときは、職員、入所者及び介護者の観覧料を免除する。

第5条 公益上その他特別の事由があると認めるときは減免する。

附 則

この要綱は、昭和49年4月27日から施行する。

附 則

- 1 この要綱は昭和49年11月1日から施行する。
- 2 昭和49年10月31日までに使用の申し込みをした者については、改正後の規定にかかわらず、なお従前の例による。

附 則

この要綱は、昭和53年10月1日から施行する。

47

ANNUAL REPORT
of the
Osaka Museum of Natural History
for the year
1977

Nagai Park, Higashi-Sumiyoshi-ku, Osaka, 546 Japan
